十七ノ十四

海國兵談

海國兵談林子平初テ開板ノ本
世ニ傳フル事稀ナリ獨リ吉雄氏藏スルヲ
但シ其本十合本ニテ一冊先是ホド板ニナリシヤ全部出来シカ
大凡コレニテ全部ノ四分余モコレアリ今二冊厚キ本アラハ全部
ニナルベシト思ハル
千辛萬苦ナ今兹其本ヲ得タリ　文化二年乙丑夏
三國[illegible]

千部施行

海國兵談序

今之所謂兵也者言用兵之理今之所謂武備也者備之之事是也兵之屬於理備之屬於事時勢使然耳所謂武備也者攻守之具則古論已至乎其測區域廣狹山河險易古今異同人物強弱天度寒暄敵國大小遠近緩急利不利衰旺各從其權而制其宜徐謀豫實必無有遺漏也而後其用差備焉不啻是也豫虞匪懈講習之務益久益精

研究周致無所不至雄武俠烈之風不撓則夫夫無有反心化外慴伏而莫或敢犯其如此而以至萬萬世使人民永莫受兵革亂離之苦者也可得而期矣業亦大也哉矣凡兵為臨時機備為太平業太平時武備不張則兵無所講兵理不明則武備無所張事理相待而已矣我

神祖開業以来昇平既久中外無事世之言兵者唯理之究卒無所施今也實 國家備于武之時哉而今之備之者徒談其理而不按其方率舊儀而忽乎講習流風漸移因循苟且其終歸廢弛使兵之與武備均屬空理可勝嘆耶亦猶兵革亂離間人情懈于文學時勢使然耳兵為臨時機備為太平業太平時止備為屬于事舍事取理未見其可雖然時勢之使然也自非大勉強斷而不能及于此也予友林子平者慷慨之士也性恬澹寡欲心存大義其親族略多縉紳子平蔑視不為家

酷好跋涉凡 邦域内經歷殆偏其自處常如在兵革間藍縷糲食草行露宿陶陶而自適云嘗憤然發志困學有年著書滿架皆言當世之策此編名曰海國兵談其意以為我 國海國也要在備於海寇故以目焉其論說確實激切如目覩其人傍採海外奇策古今未嘗見聞者出之足以觀我 國防禦之大方其所志可謂偉矣當今之世豫虞匪懈講習之務益久益精研究周致無所不至則所謂以至萬萬世使人民永莫罹兵革亂離之苦者其在乎斯歟其在于斯歟

天明丙午夏五月念六仙臺工藤球卿撰

海國兵談自序

海國とハ何の謂ぞ曰地續（ツヽキ）の隣國無して四方皆海に沿（ソヘ）ル國を謂也。然ルに海國ハ海國相當の武備有て唐山（カラ）の軍書及ビ日本にて古今傳授せる諸流の説ト品替れる也此わけを知されバ日本の武術とハ云がたし先海國ハ外寇の來リ易きわけあり亦來リ難キいはれもあり。其來リ易しといふハ軍艦（イクサフネ）に乗じて順風を得れバ日本道二三百里の遠

海も一二日に走リ来ル也此如ク来リ易キわけあるゆへ此備を設ざれば叶ざる事也亦来難シといふいわれは四方皆大海の険ある故妄リに来リ得ざるなり。しかれども其険を特て備に怠ル事なかれ是に付て思へば日本の武備ハ外寇を防ク術を知ルこと指當ての急務なるべし。さて外寇を防クの術ハ水戦にあり水戦の要ハ大（オホ）銃にあり此二ツを能調度する事　日本武備の正味にして唐（カ）山（ラ）。韃（タツ）靼（タン）等の山國と軍政の殊なる所なり。これを知て然して後陸戦の事に及ブべし。惜哉大江匡房を始として楠正成。甲越二子の如キ世に軍の名人と称するも其根元唐山の軍書を宗として誓古ありし人〻なれば皆唐山流の軍理のミ傳授して海國の議に及べる人なし。是其一を知て其二を知ざるに似たり。今小子海國兵談を作て水戦を以て開巻第一義に述ス是海國武備の根本なるゆへなり。

日本の武備ハ此水戰を第一として其上よ又一ツの心得あり其心得トいふハ古の唐山ト今の唐山ト地勢人情ともよ相違しある事也。されバ日本開闢以來外國より來り襲シ事ハ唐山の元の時代度々軍を仕懸ケし就中弘安四年よハ大軍よて押來りしかども幸よ神風よ逢て鏖（ミナコロシ）せられたり是元（ゲン）君ハ北種より出て唐山を押領しある人なれバ元の代ハ唐山ト北狄ト一躰よ成て北邊の軍止果（ハテ）たり然ル故よ遠ク兵馬を出スよも後（ウシロ）よ心得（サハリ）なかりしゆへ度々軍を仕懸ケし是よ付て唐山の時勢を考見ルべし三代ハ言よ不及。秦漢迄ハ日本の廣狹并ニ海路等のこと詳よ知得ざりし之唐の代よハ屢日本と往來して海路國郡等の事迄詳よ知たれども互よ好ミ深クありしゆへ侵シ襲フよ不及。宋よ至てハ其朝の風儀懦弱なりしゆへ是亦來り得ざりし扨宋を滅したる者ハ北種の蒙古よして即チ元

也。元の兵馬度々日本江來シ事ハ上に云シ如ク唐山北狄一躰に成て其境目（サカイメ）の軍。止果なる故遠ク兵馬を出シても後（ウシロ）の心碍（サハリ）無シ故也其後。明の世祖。元を滅シて唐山を再興シ其政事柔弱ならず能一統の業を成せり此代日本を侵掠せるの議ありといへとも北種の大敵日々月々に襲懸（オソヒ）りしゆへ遠海を絶（ワタツ）て來ルに遑（イトマ）なかりし其上。太閤の猛威。朝鮮を陥（オトシイ）レて北京江入へき勢ヒに辟易して侵シ伐へき隙なからてし間に亡されて康熙以來唐山。韃靼。亦一躰に成て今ハ愈能一統シ北邊愈能太平に成レり此故に遠ク兵馬を出スとも後の心碍（サハリ）りなし其上康熙。雍正乾隆の三主各文武剛敵にして能。時勢に達シ能唐山を手に附なり必明造の唐山ト思フ事なかれ。すで今の清を以て古の唐山に競レとも土地も古の唐山に一倍し武藝も北風を傳へて能修練シ情慾も北習を承て剛強に移り行故。終（ツイ）に北狄貪鼎

の心根次第に唐山に推移りて其仁厚の風儀も漸々に消滅し且亦世々の書籍も次第に精く成行。亦　日本ト往来も繁く其上。人心日々に月々に發明なれバいまだ唐山にて　日本の海路國郡等も微細に知得たり。竊に憶へども若クハ此以後の清主（カラノキミ）無二内患の時に乗し。且ツ元（ゲン）の古業を思イ合せて如何（イカ）なる無主意（ムフンベツ）を起ス間じきにしもあらず其時に至てハ貪慾（トンヨク）を本トすれども　日本の仁政にも不可懐（ナツク）。又兵馬億万の多キを恃メども　日本の武威にも不可畏（オソル）。是明迄の唐山と同じからざるにけ也。又近頃。欧羅巴（エイロツパ）の莫斯哥未亜（ムスカウヒヤ）其勢ト無雙にして遠く韃靼の北地を侵掠し此ごろハ室韋の地方を畧して。東の限り加模西葛杜加（カムレカツトカ）（即カムサスカ之蝦夷ノ東北二在）迄押領したり。然ルに加模西葛杜加より東にハ此上。取べき國土なし此故に又西に顧みて蝦夷國の東なる。千嶋を手に入ルべき機（キサシ）ありト聞及べて既に明和辛卯の年

莫斯哥未亜より加模西葛杜加江遣シ置ル豪傑。バロンマオリツツ。アラアダルバンシ。ベンゴロウといふ者。加模西葛杜加より船を発シて日本江押渡り港（ミナト）江下縄（サゲナハ）して其深サを計りなどし　日本を過半。乗廻したる事あり就中土佐の國において　日本國に在合。阿蘭陀人江こ認メ書を遺（ノコシ）置たる事もある之是等の事其心根可レ憎（ニクム）可レ恐。是海國なるがゆへに来ル間敷船も来ル人は機（キ）轉（テン）次第にて心易く来らるゝなり察スべし。さて海國のわけト唐山（カラ）の時勢トを弁シ得たる上に又一ツの心得ありて其心得トいふハ偏武に不陥（オチイラ）して文武両全なるべき事を欲シ願フべし偏武なれハ野之無智之元より兵者凶器之。然レとも死生存亡の係ル所よりして國の大事是に過ルものゝなきゆへ。野にして無智なる偏武の輩に任セ難き事之此故に　日本は古代は都に鼓（ク）吹（スイ）司（シ）ト淳（ジュン）和（ナ）。奨（シヤウ）學（ガク）の両院を置。國〻には軍團ト郷

學トを置て皆文武を教られたり又孔子も文武両全の意を述て有㆓文事㆒者必有㆓武備㆒矣ト宣り其外黄石公ハ文武相並て國家を經濟して
き趣を述。司馬讓苴ハ治世に戰を不忘ハ國家を保護する道なることを言り。そのうちにハ晉の六卿。齊の管仲。漢の二祖。蜀の孔明。我カ神祖の如キ皆両全の旨を會得したる人々其余。兵を談ずる人。和漢數多あれとも皆各其長ずる所のみ傳授して一方きゝの兵家なれば両全トいふへからず且亦戰闘の道。各國土の模儀（カタギ）あり其大槩を論ずる時ハ日本ハ其軍立小排（ゼリ）合之血戰を主トして謀慮少（スクナシ）只國土自然の勇氣に任セ命を捨て敵を碎く事を第一の戰法トする也。其鋒（ホコ）先ハするどかれとも法粗（アラ）キ也。持重れ位を為し難し唐山ハ理ト法トを重じて謀計多く。持重を第一義とする也。其軍立ハ堂々たれとも血戰に至て甚鈍（ニブシ）。是等の事也　日本。唐山。両國

の軍記を讀て味へバ其鋭銃（エイトン）ハ知べし。且寛永の頃。渋田八右衛門。濱田弥兵衛等只九人。臺湾江押渡て阿蘭陀の。ゼ子ラルトヽ城代ノを擒（トリコ）ニ仕なる例（タメシ）もあり。又安永中。小子肥前の鎮臺館に遊事志なりし頃。崎陽の在館（サイクハン）唐人六十一人。徒（ト）黨（トウ）して乱を為（ナシ）なる時吾黨十五人。鎮臺の令を承て相向イ即時ニ六十一人を討破リ其楯篭（タテコモリ）なる工神（ダイクカミ）堂を毀（コボツ）て帰レリ此時。唐山人ト。手詰（ツメ）の勝負を為（ナシ）て彼ノ國人の力戦に鈍（ニブ）キ事を親ラ試ミ知レリ亦歐羅巴の諸國ハ大小の火器を專トして其外の飛道具甚多し尤艦船（イクサフ子）の制。妙に精クして船軍に長ミなり殊に其國。妙法有て能治メて和親せるゆへ。同國攻討事なく只相互に他州を侵掠して己レか有トせる事を世ゝの勉（ツトメ）トして決して同國中にて同士軍をせざる之是日本唐山等の企及さる所なり兵を提ル者。此三軍情を能會得して臨機應変せバ天下に横行すべし抑

日本海國のわけハ今ハ清も古の唐山（カラ）に優（マサ）レゆへ　日本に於て油断なりかたきわけト三州各戦闘の模儀（カタキ）に別あるの三説ハ日本前兵家の未發せざるところ之其未ダ發せざるわけハ世々の軍學先生。皆唐山の書に本（モトツイ）て工夫を附しゆへ自然に唐山流に陥（オチイリ）て却て海國ハ海國の兵制ある事を発明せざる故なるべし今小子始て是を言者ハ深ク患ル所有て。廣ク問切に考て此旨を得たり此旨を得たりといへとも尋常ハ世人も口外すべからず。口外すべからざるを謹粛なれども小子ハ直情径行の獨夫なるゆへ敢て忌諱（ハカリ）を不顧。因て。ベンゴロウ。が事を始トして都て外寇の來り易きわけを有のまゝに書して却て海國肝要の武備ハ如此也ト云事を肉食の人々に知しめんト欲ル故。見聞スル所を纂集（アツメ）シテ此書を作為ス是吾小子。徳ヲ不量。位ヲ不計シテ患ルニ海國を以てスルゆへんなり是俔ラ小

子極テ潜偷也罪ヲ不遁ことを知。然ども人を
して不可取言をして不可取。是吾小子徳ト位トヲ不ニ
量計。此書を作為レテ言を當世ニ危スル所也。
而テ書成て以テ躬ラ珍トス然レども小子不
才也。文献不足。此故に字々句をも不成句々章を
不成。觀者讀法に苦むべき事を恐ル。然ト云ど
も初學の士。端を此に開て文以テ戰法を潤色
レ武以テ文華を助ケ閲クの趣を會得シ。文武
相兼て其精に至ル事を得ても即邦家を安レ海

國を保護するの一助あるべし竊に是ヲ
日本武備志ト云とも罪無ン歟只其文の拙を
以て其意を害すること無レことを希而已時
天明六年丙午夏仙臺林子平自序

海國兵談目録

第一巻
水戰
第二巻
陸戰
第三巻
軍法並物見
第四巻
戰畧

第五巻
夜軍
第六巻
撰士付一騎前
第七巻
人數組付人數扱
第八巻
押前、陣取、備立、宿陣、野陣、
第九巻
器械並小荷駄附粮米
第十巻
地形城制
第十一巻
城攻附攻具
第十二巻
籠城付守具
第十三巻
操練、

第十四巻

武士之本躰并知行割人數積付制度法令之
大畧

第十五巻

馬之飼立仕込様付騎射之事

第十六巻大尾

畧書

初巻より第十五巻迄ハ水陸戦闘（タヽカイ）の事を
述あり畧書ハ文武相兼て國家を經濟し
食を足（タレ）。兵を足（タス）の義を言て大将の心得ト
して兵の心印（インカ）トス。讀者。身ニ取て工夫を
附べし

目録終

海國兵談第一巻

仙臺　林子平述

水戦

海國の武備ハ海邊にあり。海邊の兵法は水戦にあり。水戦の要は大銃にあり。是海國自然の兵制也然ル故に此篇ヲ以て開巻第一義に擧ル事深意ある也尋常の兵書ト同日の義にあらずと知べし

昇平久キ時は人心弛（ユル）ム。人心弛ム時ハ乱を忘

ル事。和漢古今の通病也是を不忘を武備といふ蓋武ハ文と相並して徳の名也備ハ徳にあらずして事也変に臨て事欠ざる様に物を備置を云也

○當世の俗習にて異國船の入津ハ長崎に限たる事にて別の浦江船を寄ル事ハ決して不成事と思り實に太平に鼓腹せる人と云へし既に古ハ薩摩の坊の津。筑前の博多。肥前の平戸。摂州の兵庫。泉州の界。越前の敦賀等江異國船入津して物を献レ物を商ひたる事數多あり是自序にも言レが如く海國なるゆへ何國の浦江も心に任せて船を寄らるゝ事なれは東國なりとて曽て油断ハ致さゞる事也是に因て思へバ當世長崎の港口に石火矢臺を設て備を張る如く日本國中東西南北を不論悉く長崎の港の如くに備置度事、海國武備の大主意なるへし さて此事、為レ難き趣意にあらざれバ今より新制度を定て漸くに備なを五

十年にして　日本ハ總海濱堂〻たる嚴備をなすべき事得て可期、疑こと勿レ此如ク成就する時ハ大海を以て池ト為レ海岸を以て石辟ト為て　日本トいふ方五千里の大城を築キ立たるが如シ豈愉快ならずや

◯竊に憶へバ當時長崎に嚴重に石火矢の備有て却て安房、相模の海港に其備なし此事甚不審（イブカシ）、細カに思へバ江戸の日本橋より唐、阿蘭陀、迄境なしの水路之然ルを此（コヽ）に不備して長崎にのみ備ルハ何ぞや小子が見を以てせバ安房、相模の両國に諸侯を置て入海（イリウミ）の瀬戸（セト）に嚴重の備を設ケ度事之　日本の總海岸に備ル事ハ先此港口（ミナト）を以て始ト為べし是海國武備の中ハ又肝要なる所之然ト云とも忌諱（キイ）（ハヾカリ）をも不顧して有の儘（マヽ）に言フハ不敬之、不言ハ亦不忠之此故に獨夫、罪を不憚して以て書ス

◯水戦を逞クするにハ第一に艦（カン）船（イクサブネ）ハ制作に工夫を盡スべし其次ハ水主楫取に軍船の操

練を能ゝ教へし其次ハ惣兵士に水練水馬船揖の取まはしを教へし是水戦の三肝要之猶委き事ハ下に出ス所の文武兼備大學校の圖を見て知へし

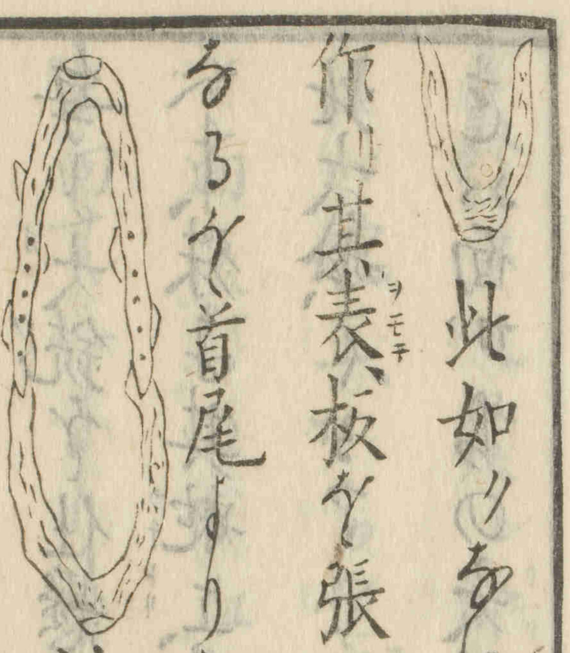
○異國の武備志にも海寇を防禦する手段様ゝあれとも是ハ唐山にて倭寇と名付て日本の海賊船を防ぐ仕形にして甚手軽き事どもなれど是を我國にて異船を防ぐ手本とハ致難し　日本にて外寇を防ぐの術ハ是に反して事大イ也其大イなるわけハ異國より　日本を并呑（ヒトノミ）せんへき為に来れる事なれハ其仕形も大仕懸なるなれハ之其大仕懸を碎くへき備なれハ是又大仕懸にあらされハ叶さる事と知へし其大仕懸の條々左に記ス

○海邊に備て異國の大船を碎くへき事を肯とするにハまづ異國船の制作及ヒ堅實なるほどを能呑込へしそれを知て然して後其術を施スへし

○當時日本江来ル異國船ハ唐山、阿蘭陀、朝鮮、琉球、暹羅等ニハ、北方より蝦夷船なれども来タ本邦ニ来レるためしなきかハ、あるい来ル事ありとも取に足ざる小船ニハ、同ク北方より加模西葛杜加（即カムサスカ）の黒船なり是亦来タ日本江不来ト云とも既ニ自序ニ言し如ク加模西葛杜加のベンゴロウ、黒船ニ乗て日本を巡見志あるためしもあれバ一圓ニ来ル事なしとも云難し其船ハ和蘭船の類にして小城の如ク堅実至極の船ト聞及びて此船来ル程なりしを先常奥及ビ上下總州等の港口江寄せし歟ト思ハる是海路の順道なれバ故斯なるべく存ル之

○唐山の船ハ長大なれとも制作の法拙キ故、其船堅実ならず、元より唐山人ハ船を呼て板ト云其心根只板トいふ心にて板ニ乗リ水を渡て用をなし迠の事トいふ心得なるゆへ其制作麁末なるを流なり只五彩の石灰を以て塗て壮觀を示スのミ之是を碎

クにハ大銃大弩を以て心易ク碎クへし暹羅、朝鮮、琉球等の船ハ大栗、唐山船の制度に倣て其作り方甚麁畧にして然も小なれバ唐山の船より又一段碎き易キ所あり、阿蘭陀及ヒ歐羅巴諸國の船ハ其制作甚堅実廣大也勝レるバ大銃にてもこれを碎ク事あたハず元より西洋人、船を呼て水城トいふ、唐山人の板ト云ト天地懸隔の違也既に水城トいふ上ハ其制作の堅実廣大思イやるべし、まして自然の又木



此如クなれバ大材を連ねて船の骨組を作り其表ハ板を張へし所ハ亦同ク又木の長大なるを首尾より組違へにならべ継かさねて此如ク積上ケ鎹の柄の如クなる鉄釘を密に打貫き縦横に縫合せて仕立ル也其空隙の所ハ瀝青を込、又外面の水に浸ル所ハ悉ク鉛を以て包て水をして一滴も船ハ木江受さらしむる、船の長サ十六丈闊キ事四丈、深キ事二丈五六尺、帆柱四本を建ツ

中央（マンナカ）の大柱、高キ事十九丈アり帆十七幟（ハタ）十二を懸ケ、船内ハ板敷を惣三階ニ張詰て所々ニ天窓（ヒキマド）を設けて明（アカリ）を受ク一階毎ニ上下の間九尺余ニ其廣ハ平なる事馬場の如シ第二段目の左右首尾ニ方三尺許の窓、三十余口を開て窓毎ニ大銃（オヽヅヽ）を仕懸置ニ其大銃三貫目の丸を入べし、殊ニ其舵工（カヂトリ）、甚妙ニして一度船を繰（アヤツ）れハ此大船、くるりト廻ルニたどで面楫（オモカヂ）ニ敵アりしハ面かぢの大銃十二位（カラ）を一より十二迄順ニ發（ハナ）スへ發シ終（ヲハリ）シ時、相圖を以て舵工（カヂトリ）ニ命スれハ舵工、かぢを繰（アヤツ）りて船を廻して忽チ取楫を面かぢの方江向れバ亦取かぢの大銃を敵ニ向て一より十二迄順ニ發ス之其際（ヒマ）ニ初メニ發シたる面楫十二位（カラ）ニ玉込して相圖を待之、玉込をなせるニハ窓外江指出（サシイダ）たる大銃江船の上より移りて筒の巣口（スグチ）の所ニ馬乗ニ跨り居て込ルニ火薬ハ紙の袋ニ入レて袋の儘ニて込ルへ既ニ取かぢの十二位を發シ終れハ

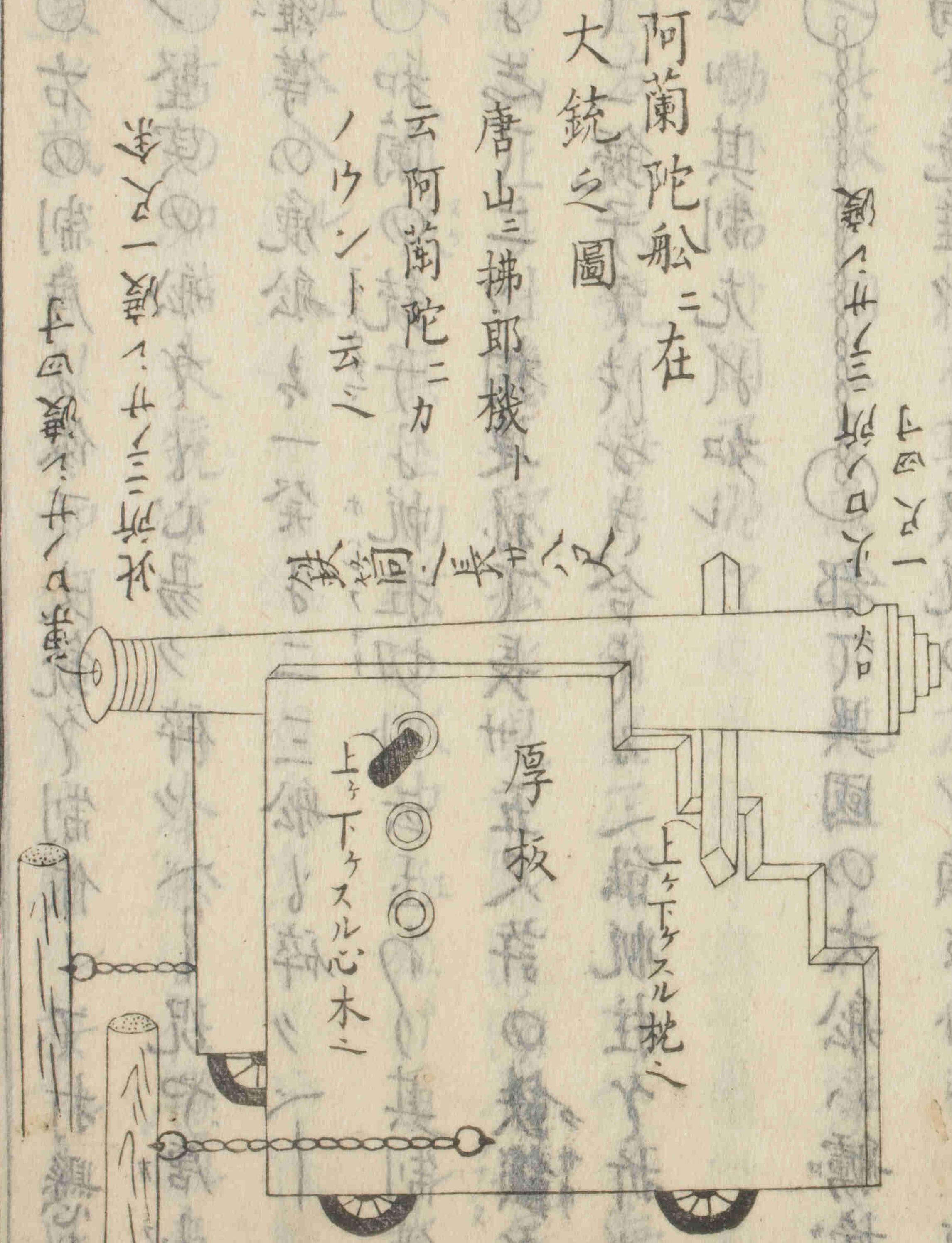
赤船ハ初メの如ク直ニして面楫を敵に向ケて発スなり其妙、言語道断にして　日本唐山等の企及ブ所にあらず水戦に用て利あるものハ此船よりよきハなく敵に取て恐ルべきものハ此船に過たるハなし斯の如くなる故中にも尋常の大筒にて砕カるゝものにあらず亦近頃、和蘭人の持渡しゲレイキスブツクといふハ意太理亜（イタリヤ）の武備志を見たるに水戦の事ハ此船のミならず都て廣大無上にして甚ク巧ミなる戦艦（イクサフネ）多クある之其書ヲ見て大畧を知べし

○右の如ク堅實至極の大船ある事なれども猶是を砕ク工夫を為べき事海國第一の戦法なるべし能心を用べし

○小子工夫せるに和蘭（ヲランダ）船に仕懸置所の大銃（ツヽ）ハ皆前文に言し堅実の大船を相互に砕（クダ）ク為の具なれバ此大銃の制度に倣ハヾ堅実の大船をも心易ク砕クべし安永中小子和蘭船に入

丆其大銃の制度ヲ量リ定（サダメ）て冊ニ書ス其制度左の如シ

○筒の長サ八尺○同ク太サ筒先ニて指渡シ一尺一寸薬持の所ハ次第ニ太ク成丆其第一太キ所指渡シ一尺五寸○筒の巣（ス）口の指渡シ四寸（一貫目ノ鉛玉、指渡二寸九分三厘余ナレハ、指渡四寸ノ玉ハ二貫七百目程ナリ）⊕大筒の圖左ニ出ス

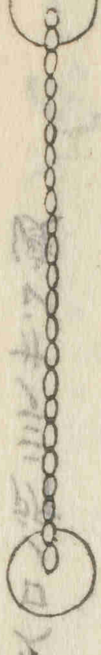


阿蘭陀船ニ在大銃之圖

唐山ニ拂郎機ト云阿蘭陀ニカノウント云フ

○右の制度に倣て大銃を制作して打懸れば彼ノ堅実の船とても心易く砕くべし況や唐山（カラ）、暹（シャ）羅（ム）等の麁船は一発に二三船も砕くべし

○和蘭の銃子（フラホウタマ）に帆柱切（ホハシラキリ）ト云玉あり其制、鉄丸にして二ッ相連ねて長サ五尺許の鉄鎖（クサリ）を以て二銃子をつなぎ合せる之能帆柱を折ルト云ハ其制左れ如し



都て異國の大船ハ艫（ロ）撈（カイ）一向に施難くして只帆のミを頼ミトせる故、帆柱を折（クジカ）るれば甚難儀に及て終に乗取る、とへし此故に相互に敵船の帆柱を折る事を第一の働ト為ト聞及ひて

○右の大銃を海岸に備置て発スへし又海邊の山上に仕懸て敵船を見下して手前艜（ブナ）（フナバタ）を打へし、打抜（ヌケ）ば其玉向舷の水中（江）ぬけ通ル故船（江）水入ル、

○右の如キ大銃を　日本船に仕懸ル事ハ未タ試ミされば如何とも言難レ按ルに此大

銃を　日本船に仕懸て玉入りを発さバ必船開き損せる事あるべし能試ミて後、船に仕懸べし○又按に敵船の陸に近付くを打破ル為の備なれバ船に不仕懸して海岸にのミ仕懸置ても用足ルべき也○一貫目内外の大筒を　日本船に仕懸て水戦に施スべき事ハ下に記せり、二三貫目の大筒を施ス事ハ未知○大銃を以て大船を砕くの働ハ此趣を主意にして損益せバ大筒さへ有バ心易く打砕かるべき事也然ルに　日本風にて古来より大筒の制作甚不足也是海國の議に心附ざるゆへなり然ル時ハ海國第一の武備全からざるに似たり願くハ前文に言し大銃を夥く制作して　日本の宝ト致度事也然とも當世を公私ともに華美の雑費分に過て多きゆへ大筒の新制なとハ中〳〵思イも寄ラざる事なるべし然ト云とも明カに弁れバ華美ハ禁ズべし海國の武備ハ闕（カク）べからず仍其旨

を周く天下の人々に呑込せて雑費の出さる様に制度を定め自然と質素（シツソ）に移る名法を施して上下の費をはぶき國家を富せて其後大小名の禄に應じ亦は國土貧富の場所に應じて大筒役と云金銭を少しづゝ出させて上に言し所の大銃を年々数を定めて制作し日本國中の惣海濱にそなへ置き、是を日本永代の武備として天地と共に不已の掟と定め度事也此大銃（ツヽ）の備を惣海岸に設けさせたし　日本の武備全く整へりとは言難かるべし

○竊（ヒソカ）に按するに　日本開闢より二千年来此大銃の備を海岸に不設して今に至て猶安全なり其上外寇の為に嚴くなしなめられし事も今日に至ル迄曾て有らざる事なるに今新たに此海國の備を事々敷言出す事且は思慮の過なるにも似且は新説を好（コノム）にも似亦は狂言を発するにも似たり然と云とも天地間

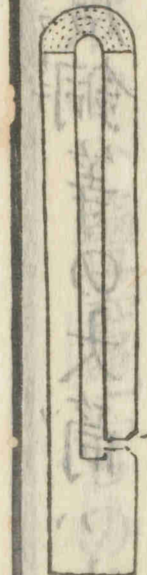
人間世の事にハ必変革ある理也
必萬々世も一定の今日ト思ことなかれ其上、
五世界の國々、早ク開闢したるハ今年迄六七千
余年、遅キも三千年に足さるハなし然ルに各
國、皆英雄豪傑あり各三千余年の智を積て天
文、地理、海路、等を度量（ハカリ）して掌上（テノウヘ）に見ルか如シ
○然ル故に相互に他の遠國を侵掠すへき工夫、
五世界の英雄豪傑等互に是を旨トせる事當
世一統の人情トなれて就中、欧羅巴（エイロッパ）の諸國、妙

法を奉するの國人殊に此情多し然レとも遠
國を取ルにハ妄りに干戈を動さす只利害を
説諭して其國人を懐ケて然して後に押領ス
是ニ因て憶へば今日本ハ欧羅巴ト路遠
し其上、彼（カレ）か説諭（セツユ）（スヽメ）ハ古來より取用さる人情之、
其干戈ハ路遠キ故施ス事を得されバ
我に於て欧羅巴ハ患ルに不足へし然ルに竊に
聞ル事あり近年、唐山、韃靼の人等、欧羅巴（エイロッパ）人ト
交親（ゴレハリシクレム）ト云り愈親（シクレヘ）みて唐山、韃靼の英雄豪傑等、妙

法ヲ受ヘシ妙法ヲ受得バ侵掠（オカス）の心起ルべし、彼等侵掠の心ヲ起して日本江来ル程ならバ海路ハ近し兵馬ハ多し、此時ニ當て備無くして如何ともせざる事なかるべし熟思へバ後世必唐山韃靼の地より日本ヲ侵掠せる企ヲ為ス者起ルべし怠ル事なかれ是開闢より三千年の後今日ニ至て小子始て発言せる所なり竊ニ憶へバ此説話（ハナシ）小子が度（モチヘ）ニ過たり若クハ鹽竈宮の神詫ニもあらん歟

○鉄唐銅（カラカネ）等の大筒ハ定式ニして能人れ知ル所之尤一たび制作して千年ヲ有ツものなれバ此器ヲ重宝ト為ル事ハ論ニ不及之、然レども大器（タイキ）遅成（ヲソクナル）の理ニして積年の制作ニあらざれバ數（カズ）ヲ得ル事不能之、若急速ニ數（アマタ）の大筒ヲ用ル事あらバ當坐の間ニ合ニ松の木筒ヲ用べし指當ての急ヲバ弁スル之、然ト云とも是ヲ恃て真の大筒ヲ制作せる事ヲ怠ルことなかれ

○松の木筒、鉛丸を飛せて遠キに及ぶ所のものなり然レども久ク用ルに不堪、只五六発に限ルべし其制ハ生の松の木を丸ク削て二ツに引割、其中心に玉の入ル程溝を抉ル、末をば、抉止に為スべし抉り終て二ツを合せて竹の箍にて首より尾まで透間なく懸ケて用べし真の筒に減ざるものなり尤精火なるべし抉り様左の如し



是ヲ二ツ合セテ筒ニスル也

○火薬の制方ハ大槩九二、一の法を用ユ、硝九匁灰二匁硫黄一匁右細末し煎茶を以て煮合セ竹筒中に搗固メ竹を割て取出し細カニ刻ミて用ルなり又十、二、一の法モあり十三、二、の法モあるなり

○丸ハ鉛を上とし次ハ鉄次ハ銑次ハ石次を煉丸なり煉丸ハ砂石及ヒ銅鉄の滓を細末して漆或ハ膠を以て煉堅メて玉トなし布を三偏衣セて用ルなり又性好埴土に苧ズサを切交へ

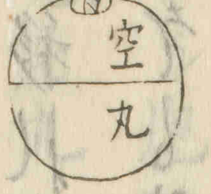
て丸となし布を三偏衣せて用ル之弱キ茱にて近キ船歟備を打によし、又イスブナ樫等の堅ク重キ木を玉に造り潮泥中に埋貯入用の時ハ表皮を乾シ用べし

右玉藥も變に臨て急速に拵へらるゝものにあらざれど太平閑暇の日漸々に制作レて貯置べし筒あれども玉茱無レ之詮なき事之○火茱も久キを經て少し損傷せざるもの之小子安永中に元和年制の火茱を得て自ラ発シて試シに却て新制の藥より好様に覚ゆる之貯ルにハ銅器歟大瓶に入て埋ミ置べし

○大炮を以て大船を砕ク事ハ前條既に詳之其次ハ乱火、棒火、矢等を以て焼討を為べし別シて黒船ハ、蛮瀝青を塗故、殊に火移り易キ也扨焼討に様ゝあり左に記ス

○大筒ニ炮爍火あり其制、銅を以テ径リ三四寸の空丸ヲ拵（銅鑵ノ半片ヲ二ツ合テ丸トスル之）其中ニ硝五

十目 硫十二匁 灰五匁 松脂四匁 樟脳三匁 鼠糞二匁 右細末シ水糊ヲ灑て五寸廻リの竹筒中ニ搗固メ竹を割て取出シ鋸を以テ長サ二寸許ニ切、紙袋ニ入、此物を四塊（ヨツ）銅鑵中ニ居、空隙の処ハ火薬ト硫霜ヲ込之（火薬ハ銅鑵ヲ割、袋薬ハ物ヲ焼硫霜ハ人ヲ眩ス）尤銅鑵ハ道火縄ヲ指て外面ハ漆布ニて張固ルなり此くすりの加減制法甚大事なりとく〳〵大銃家の秘傳なりそれ術者をもちゆべし

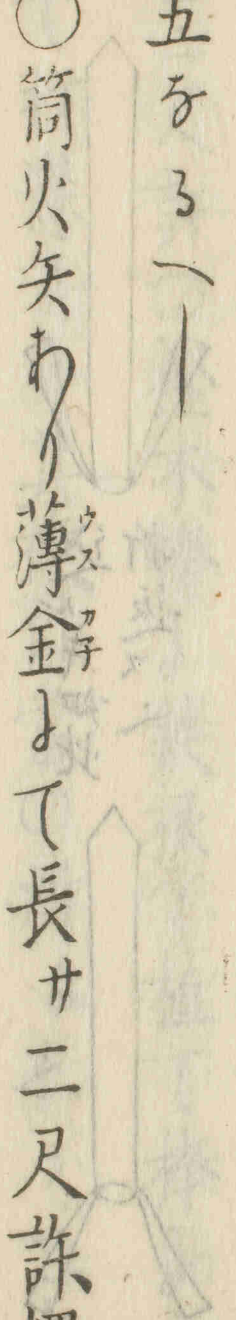


道火縄一寸なるを頭（カキ）ニ三分出シ置余ハ横ニ眠（ネセ）て漆布ニて押置（オサヘ）べし

右の丸を二三十、一同ニ打込べし如何なる大船をも忽チ焼崩スべし

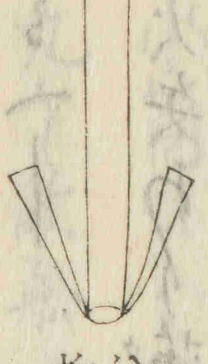
○乱火の法なり其制、鉄を以て小筒を數十挺拵、（小筒ノ制ハ長サ二寸ニシテ三匁ノ玉ヲ入ベシ筒ノ末ニ火口有テ道火ヲ指採ニスルナリ）此筒ニ常の鉄炮ニ玉薬を込ル如ク火薬八分つゝ入レて玉を込メ堅クつき固むる之尤小筒毎ニ道火縄を指之此小筒を十四五挺、筒

先を外（ソト）に向ケて縦横に組合せ細キ苧縄を以て結固（ユイカタ）メて丸くなし其際（ヒマ）（スキマ）〳〵には粗末（アラキ）の火薬を所〻に込て外面より道火を指込置之扱綿布を以て能巻て高卑れ無キ様に圓形（マルク）をなさしめ小筒〳〵の先をハ不閉して現ハし置也此丸を敵船江打込て亀角有る間に大道火より胴薬江火移り胴薬より小筒〳〵の道火江火移れども十五挺の小筒鳴響て鉛玉飛出せハ人をも破り物をも砕く之尤此丸（タマ）をハ初段に言し炮爍火ト相交へて打込へし炮爍ハ物を焼、此丸ハ人を破ル故、人近づく事能ハずして終に焼上ル之炮爍火十五あらハ此玉も十五なるへし

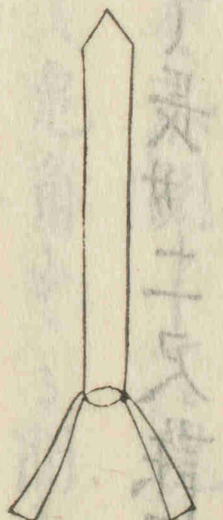


○筒火矢あり薄金（ウスカネ）にて長サ二尺許廻リハ大緊八九寸に筒を張り其中に竹に込める大薄（スキ）の花火を入子（イレコ）に為（シテ）（竹ニ込スシテ鉄筒ニ直ニ込レハ一緊ニ火移テ早ク燃盡ル故竹ニ込テ入子ニスルナリ）道火を指之尤鉄羽を附されとも飛ざるもの有り鉄羽の附様ハ蝶つかひ

ニして大筒江込ル時ハ其鉄羽を筒先の方江折（オリ）返して込ル之打出して筒を離ルれバ其鉄羽ハ後口の方江開イて風を含ム故筒矢直（スグ）ニ飛之鉄羽の附様左の如し



込ル時如此
折返ス之



飛時ハ如此
開ク之

右大薄（スキ）の花火中江別ニ焼（ヤキ）薬を丸ニして込されども物を焼事不能也秘傳之ト聞及これ大畧ハ上の炮燥れ火薬を胡桃子（クルミ）ノ

大ニ丸ル筒ニ應して込ルニハ何レニも大銃（ツヽ）の秘傳家を用べし

◎棒火矢ハかり尋常の六尺棒の太サニて長サ三尺許の樫木棒ニ鉄根を植て棒ニ火薬を塗て打懸して其棒目當の所江志ゝルニハ立て焼之其薬法ハ

焰硝　五十目　　硫黄　十二匁　　灰　五匁
松脂　四匁　　樟脳　三匁　　鼠糞　二匁

右日本方

又一方

硇（十匁） 硫（八両） 灰（三両三錢）

右兵衛の方

右何レも細末レ薄糊ニ和レて棒ニ塗ㇾ之塗様小棒ニ溝を三道穿て此薬を溝ニ余て惣躰へも厚サ二分許懸ル程ニ塗附て外面を紙ヲ以て張固ムへし尤鉄羽を附ル事上ノ筒矢ノ制の如レ此矢を二三十本高処より船中江打込へし或ハ船の横腹亦ハ艫の方舵の附（ツク）所江打込ミて善トス

○初ニ云レ炮爆火を三十捺細キ紐（ヒホ）を二尺許附て一人小一ツゝ持せ小船二艘ニ乗ル一艘（ニ十五究持乗ル）ハ敵船の左右ニ忍ひ寄りひそかニ道火ニ火を移て一同ニ敵船江擲入へし尤砒霜等あるへし

○小棒火矢百挺を制して五ツニ分チ一船ニ二十挺ツゝ乗せて敵船の左右ニ忍ひ寄り二十挺ツゝ同し矢坪を志て五ヶ所ニ打懸て焼

立べし

右の外、焼討の法又ハ曲打火矢、繰玉（カラクリダマ）、狼煙（ノロシ）、花火等の仕方大筒家ニ數々の傳授有て各秘する所あり都て火術ニハ其術者を用べし

○弩弓を以て火矢を射懸ル術あり其法陸ニても射出し亦船ニ仕懸ても射ルべし何レにより射ルにも弦（ツル）を張リ矢をはげひて後口薬ニ火を移して發スべし　○船ニ仕懸て敵船ニ押寄て射ルにハ一弩ニ二人懸リなるべし一人ハ弦を張リ一人ハ矢をはげひ火を指べし都て弩ハ矢はげひ早きゆへ鉄炮火矢ニ勝ル事もあるなり尤楯を仕懸て漕よすべし

⊗火船の術あり其法軽キ船ニ乾キたる柴（シバ）萱（カヤ）を船一盃ニ高ク積て縄を以て四方より引懸て崩レざる様ニ固メて柴ニハ油を灑（ソヽ）ク又其積疊（ツミカサネ）たる柴の上ト舳（ヘ）先トニ帆を懸べし扨筒（ツヽ）切（キリ）の焼（ヤキ）薬（炮爍火ノ処ニアリ）二三十斤を箱ニ込て両方ニ道火を附

ケ丈夫ニ足の附なる臺の上ニ載て船の中央（マンナカ）ヘニ置キ縄ヲ以て船梁（バリ）江結止メ桐油紙、渋紙の類ヲ以て箱ヲ盖置（オホイ）ヘし又別ニ火薬ト焼薬ト等分ニ相交へて二个（焼薬ハ上ノ炮爍火ノ條下ニアリ）小箱ニ入て是ヲ三（ミツ）箇掠、道火縄ヲ指て柴の間ニ結付置之扱大風の時、別船ヲ以て風上より火船ヲ引廻シて敵間六十間許ニて小箱の道火江火ヲ移シて敵船の密ニ催合（モアイ）なる所ヲ目當ニ馳込スヘし（道火縄ハ大槩六十間ニ二寸ト積ル之）扱此船、敵船ヘ押付て彼是騒ク間ニ小箱の薬燃立て柴ニ火移れバ彼ノ大箱ヘも火移て燃出レど柴の火氣盛ニ成て忽チ敵船江火移ル之尤此箱薬も制法甚大事之

○西洋船ハ一艘ヅヽ離レ居て催合（モアイ）ヲ成さる之此時の火船ハ別法あり、但シ火船の制作ハ始ノ如シ此火船ヲ小早（コハヤ）二艘ニ引せるなり小早の水主ハ一艘ニ十人なるへし扱其火船の首尾（カレフレリ）ニ長サ一丈許の細キ鉄鎖（クサリ）ヲ首（カレフ）ニ二筋、尾

に二筋付ハ此四筋の鎖の先に長六七尺の棒を附ケ棒の先に尖利（スルト）なる鉄の根を植ユ、扨此鎖を火船の首の小早に二筋尾の小早に二筋取乗せて火船ともに三艘連續して焼へき敵船の揖（カヂ）の近所江押付へし其時十人の水主の内二人ハ手廻（マハシ）早ク彼ノ鎖附キの大捧を敵船の船板江力を極めて突立へし但し揖江突立ル事なかれ又二人ハ手廻早ク彼ノ焼（ヤキ）草を込ある花火數本に火を移て小箱に近キ柴へ指込へし此働すミ次第に小早も早く船を漕除（コキノ）クへし火船より七八間隔れど火草震動しても怪我（ケガ）ハ無もの卜云り扨首尾の花火より柴に火移れど大小の箱草焼起り大火に成て敵船江火懸ルへし

○船中江棒火矢焙烙火の類を打込にハ隨分真中江打込ム様にすへし亦外より仕懸て焼に揖の所より焼懸ルへし是揖柄（ツカ）の穴有故船中江火氣通り易し其上艫（トモ）の方にハ部屋く

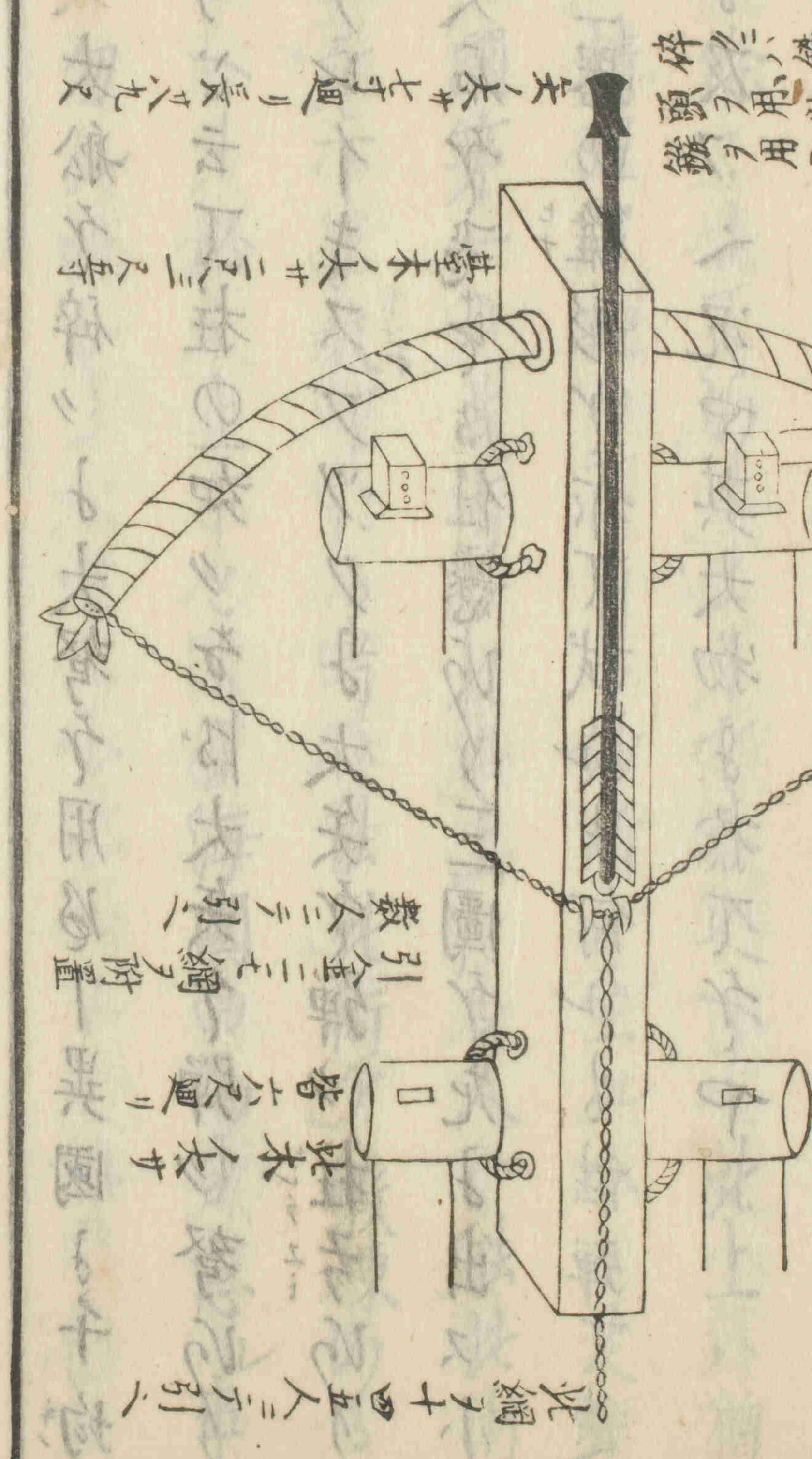
ハもあり物置もあり窓も多き故船内（近）火移リ易レト知へし是焼討の心得也

大銃（オホヅヽ）の制作、打形、及ヒ焼討の大畧ハ右の條々にてあらましを呑込へし此上ハ猶精理を極めて自ラ妙所に至ルへし是海國第一の武術なれハ上たる人ハ能此術を下に教（オシヘ）下たる者ハ能此術を鍛煉あるへし必ス上下ともに海國の為に怠ル事勿レ

○又大船を碎クに大弩を用ゆ是異國にて千均（キン）の弩と云て柱の如クなる大矢を弾ク弩あり亦ゲレイキスブツクにて大矢を弾ク柱弓（ハシラユミ）あり亦大石を飛する仕懸あり三圖を左に出ス小子三器の雛（ヒナ）形を作て試レに何レも能弾て遠キに及フ之況や其大物に於てをや

三器の圖左の如シ

大弩之圖

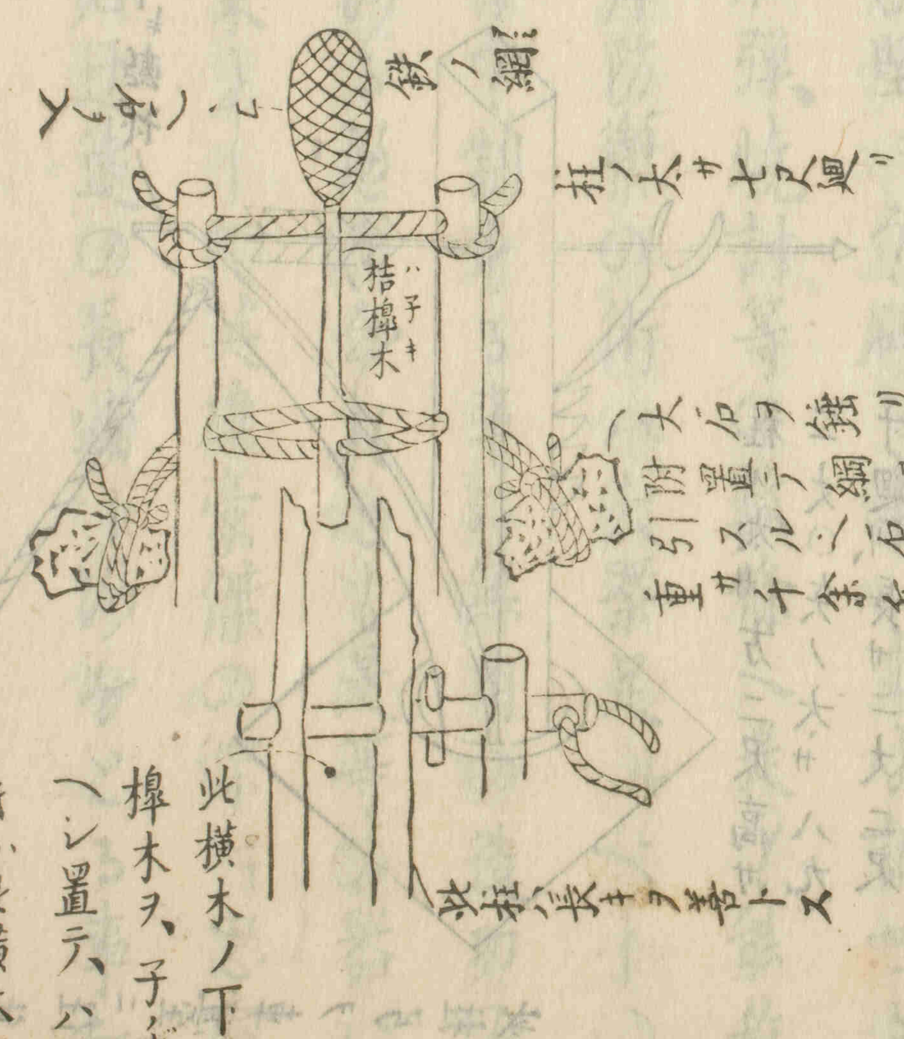


● 弓ノ長二丈、厚サ四寸廣サ七寸

● イスノ木、ブナノ木、カシノ木等ヲ用

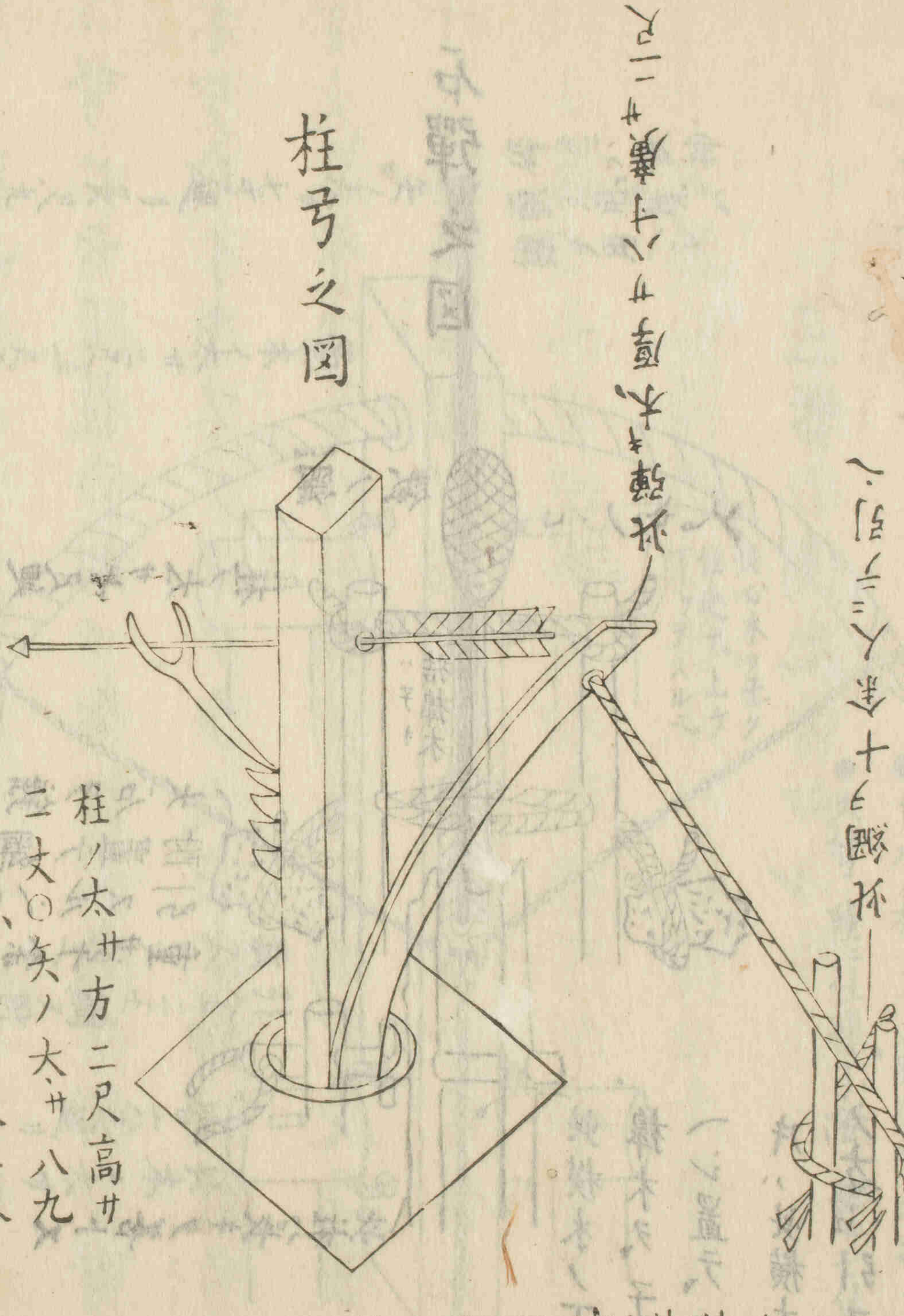
● 大弩ハ陸ニ仕懸、小弩ハ船ニモ仕懸ルヘ

石彈之図



此横木ノ下江枯槹木ヲ、子ノ力ヘシ置テ、ハ子ル時ハ此横木ヲ放ノ方江引ヌクヘ

柱弓之図



柱ノ太サ方二尺高サ二丈〇矢ノ太サ八九寸廻リ、長サ一丈二尺

此柱弓ヲ車臺ニ仕付テ
持アリクヿモアルヘ

○遠キニ及ヒ堅キを碎ク事ハ上ニ記セる大銃、大弩、柱弓、石弾、焼討等の數條ハ是を能教諭鍛煉セバ海岸防禦の術ハ大槩足ルヘし○大弩、石弾、柱弓等を制セる事ハ無用の造功の様ニ思フ人もあるへきなれども是等の器ハ火薬を惜ム良策ニして英雄豪傑の深キ思慮ニ出タル事ニて必迂遠の長物トハなさゞる事なかれ制スヘし

○飛道具を以て大船を破ル術ハ是迄ニ記し

終れり因て、此次に年譜の水戦法を記ス然ども諸流に傳授せる船軍ハ只小船同士の戦法のミにして異國の、城れ如キ大船江我が小船を以て仕懸ル傳ハ更に無之、今此書ハ我ク小船を以て異國の大船を悩スべき術を旨トしたる書なる故まづ其術を初段に記ス也是を知て然して後小船同士の小排合をも不知もへし

○小船にて異船江仕懸て働クにハまづ唐山

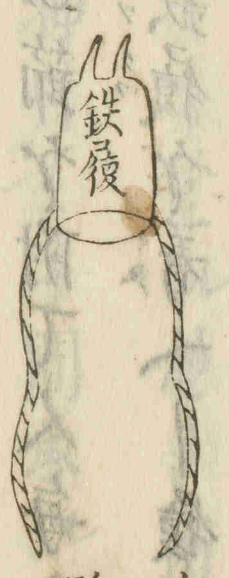
和蘭等の大船れ長サ高サ等を知て然して後其術を施スべし、大槩唐山の船ハ長サ二十余間、横五間余、深サ二丈余之其船の制甚反（ソリ）高之此船に四五百人も乗レハ船の中頃にて水面に浮び出ル所の高サ七尺余出ル之舳（ヘ）先ハ一丈四五尺浮び出、艫（トモ）ハ一丈許出ルなり○阿蘭陀船ハ唐山船より甚高大にして然も堅実之其長サ二十四五間、横六間許、深サ三丈五六尺四丈に及ブ之其船の制反無（ソリナク）して平作リ之其

水上ニ浮び出ル所は高サ惣躰二丈許也日本の番船を（番船ハ小船也長サ六七間也）阿蘭陀船江押付て阿蘭陀船は横腹ニ仕附ある所の階子(ハシゴ)を登ルニ大聚二十階二十一階登ル也一階一尺ト積リても二丈也此如ク大船なるゆへ日本の船を押付ても登ルべき術なし勿論小船を大船の際江押付て手間取ル間ニ大船を廻サるれば忽チ押沈メらるゝ也然ル故ニ押付ルト即時ニ飛登ラされば犬死(イヌジニ)をする也其

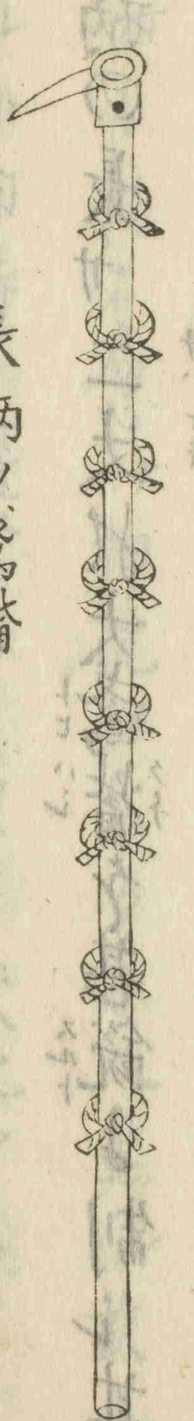
飛登ル術左ニ記ス

○柄の長サ二丈は大鳶觜(トビハシ)(クチ)を甚鋭(スルト)ニ制シ其柄ニ一尺隔ニ縄巻(ナハマキ)の節を附て人毎ニ此器を持チ赤爪(ツメ)を植(ウヱ)たる鉄履(テツクツ)を着(ハク)べし履の制ハ下ニ図ス扨阿蘭陀船江押附ケても即時ニ此鳶觜を船の上段ニ及ばゞ觜打込ミ彼ノ爪履を船板江踏(フミ)懸かりゝあぐて登ルべし登リ終らば手廻シ早ク船中江飛込て切立べし然シなから此働ハ五ノハヤ十人の小人数ニて登レても皆雑

落されて死スべし法ハ戦士二十人乗の小船を二十艘乗揃へて大船の左右江十艘ずゝ一同に押付ケ一同に打懸ケ一同になぐり登リ一同に飛入べし甚大事の働ハ能く教諭繰練有るべし



此紐ヲ以テ踵ヘクヽリ付ルヘ



長柄ノ鳶嘴

小子此両器を用て異國船江なぐりて登リし事ハ未タ試ミされども尋常の直立（スクダチ）の所江登て試しに思ひの外能登らるゝもの也三四度の稽古にて身も軽ク覚（オホヘ）気位も滞りなく覚ゆる也疑ふ事なかれ

○或説に右のなくて登りをするに左右より一同に懸れハ船中も左右に備て防ク故登リかたしなどいへり小船二十艘なりとも十艘左方より押よせて短兵急に攻登ル躰を現ハし後

し船中其先方を防ク為ニ人数皆く左方ニ片よるへし其時殘リハ十艘手廻早ク右方江押付てゆくて登るへし登ル下等ク拔連て船中を薙廻ル御座し其騒動中ニ左方ハ人数も登りて切立ル之拔ニ左右より懸ルとも一方より懸ルとも時の宜きニ隨ク御座り何レニも手廻しさへ早けれハ勝を取御座しと思ハる働を悠ニする事なかれ

○中船ニ御堅メの荷を積て其上ニ高サ二丈許ハ階子（ハシゴ）五挺を建て左右江四五尺ばく河かく様ニ仕附置御座し此船ニ戰士五十人を乗せて十艘を一組として五艘ばく敵船の左右江押付て彼ノ階子より傳（ツタハ）り登ルへし尤何レも鳶嘴を持て船端江打かけく攻入御座し鳶嘴を用ル事ハ階子を押倒されぬ為之船中ニ飛入ては無二無三ニ切立へし

○小船十に五艘ニ戰士十五人ばく乗せて何

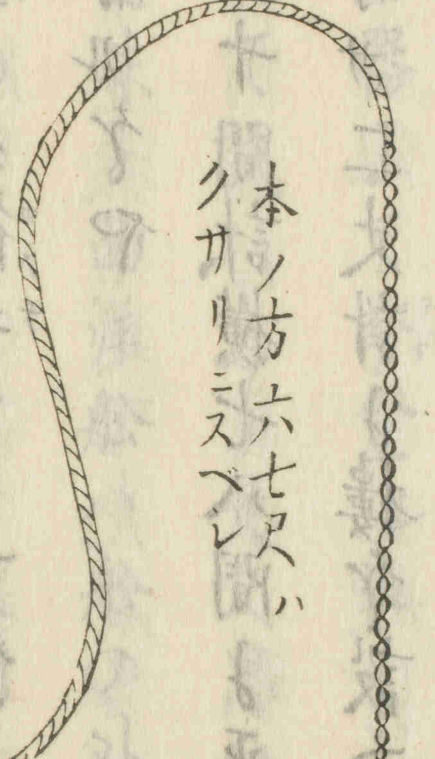
レも初メに云レ鉄履を着せ其(ハカ)上に柄の短キ鵞觜を両手に持せて大船へ押寄ル卜即時に両手の鵞觜を打懸ケ鉄履の爪を踏懸ケ挙登(ヨヂ)ルへし、のがりたりしも抜たれて切立候し

右の器にて挙登(ヨヂ)ル事も小子直立(スグタチ)の所江登リて試ミぬり是又思ひの外登リ易キ事ハ殊に西洋船ハ船の外面に大綱(ツナ)、大錠、水揚(アゲ)の器なと有て取附易キ故、無事の時

挙登レども徒手(カラテ)にして登ラるヽハ況ヤ具を用ルをや

○長サ五十間計、横七八間にて平カにて大なる船を制レ高サ二丈計に楼を設へし、楼の廣サ三間に六間なるへし、四方に高サ三尺の囲を附ル、此楼を二ツ建て楼の内に階子を仕附ケ上の坐江登ル様に構(カマ)ヘ、戦士三百人を乗セ二百挺の櫂(カイ)を以て船を進ませ敵船江押付ケて弓鉄炮鎗長刀等の働を為サしめ、近付て打鉤、鳶

艢等をも打懸て敵船江乗移り大働して敵船を乗取へし是又和蘭流之但し此船ハ脚遅キ故大銃をも設ケたる大船へハ酙酌あるへし尋常の大船をも乗取へし能臨機応変せよ

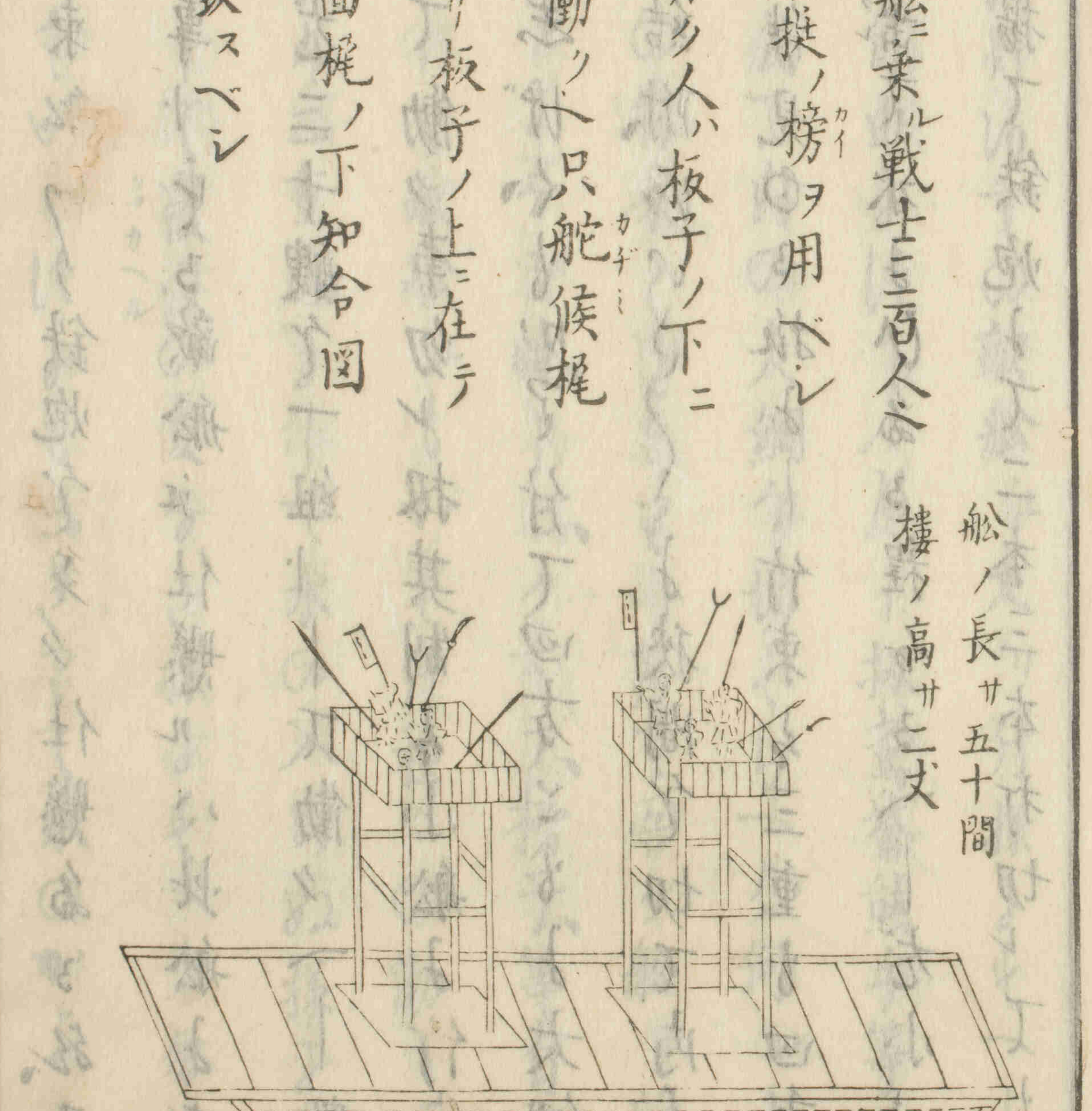

本ノ方六七尺ハクサリニスベシ

打鈎

◎此船ニ乗ル戦士三百人之

○二百挺ノ榜（カイ）ヲ用ベシ

榜ヲカクノ人ハ板子ノ下ニ在テ働クヘシ只舵（カヂミ）候梶取ハカリ板子ノ上ニ在テ取梶面梶ノ下知合図等ヲ致スベシ


船ノ長サ五十間

樓ノ高サ二丈

○竹束船なり鉄炮をて多ク仕懸たる船、又ハ焼討を専トせる敵船江仕懸ルハ此船にしくなかし尤二十艘を一組トして働クへし数少キ船にて働ク事勿レ扨其制ハ小船に竹束を幾重（エ）もしげくしかと付て四方ともに大綱にて内に結附、なハいさゝかに狭間を切て内より四方の舷見ゆる様にし竹束ハ三重も四重も仕附て置て水にひたる程なるへし尤小キ帆を数ゝ揚て鉄炮にて二本三本打切レてもかまはず目あての敵船江走り付様にすへし尤艣（ロ）櫂（カイ）も自由になる様にし扨鳶觜熊手等の届ハ段に成て内の大綱を切てらへし何レにても一方の竹束ぐさらりト落て吾が船ト敵船ト肌合せになる時、トビ、クマデ、梯子、等自由に取まはして敵船江もがと付種ゝの働キなるべし船ハ二重底にして水の入らぬ様にし底を重クして覆没（クツカヘル）の憂なき様にすへし勿論板子の下をいくはにも志きまて水のかよはぬ様

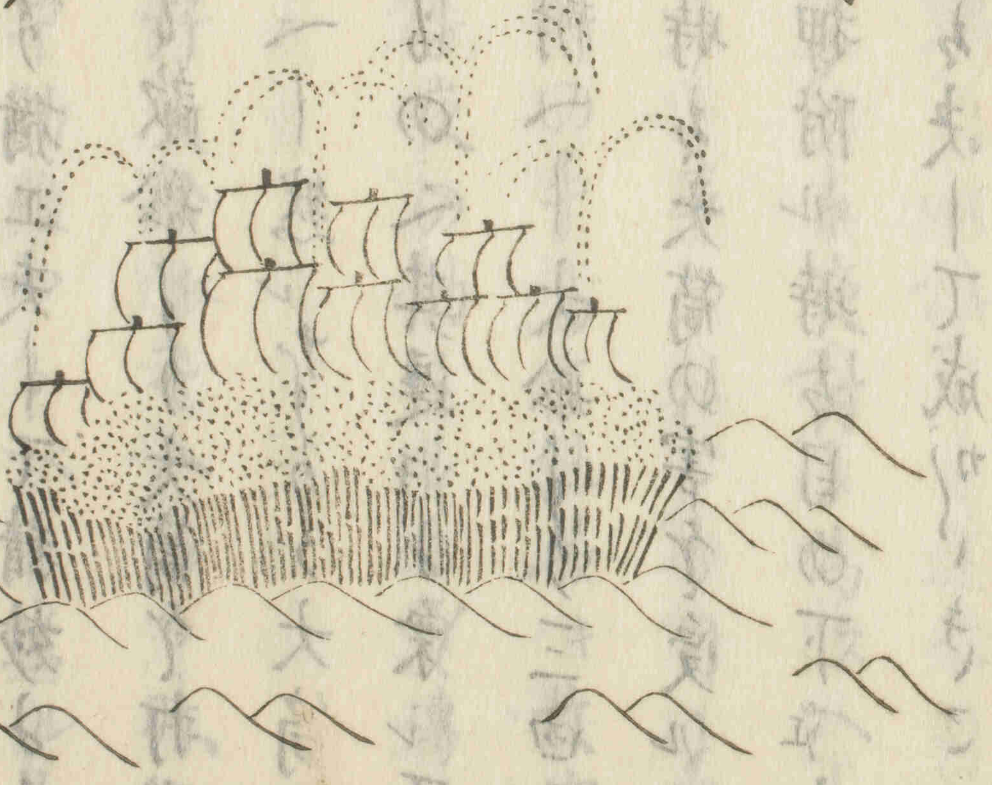
に塗堅ム置し是ハ銃丸（テツオウ）にて打ぬかれてもしきことの外江水のこをらぬ為之尤此しきこを此船に限らず軍船ハ悉ク右の如クしきるへし亦船毎に水をちきを多ク用意し常に水をてらき上て竹束れぬきひぬる様にして焼討の難を碎（サツ）へし竹束を畢クもへし風まけせぬ為之都て此船も火船同様にて大風の時風上より仕懸ルかよきと其制作并に働等の事ハ能操練して其妙處に至ルへし

竹束船之圖

○船ノ見ヘヌ程竹束ヲ厚ク附ル之

○図ノ如ク不断水ヲ揚クヘし

○帆ハ一船ニ十五六懸ベし



右の数條ハ異國の大〻船を攻討べき趣向の大畧あり猶工夫して精妙に至ルべし但し何レも敵船より大筒を打懸ケらるゝ事あるべし然レなから大筒の態ハ手廻レ遅きものハ其遅キに乗して手間疾（トク）大船江押附へし大船より三四十間以上離レ居ル時ハ大筒の害を受ル之早ク敵船の際江押附ル時ハ目の下江大筒を打懸ルことハ決して成かたきことゝ知

べし

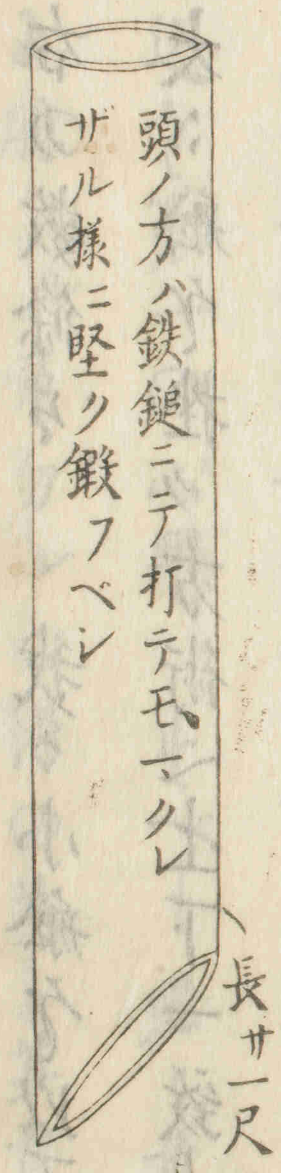
○右数條の働ハ多クハ夜討に為スへし時宜に因て晝（ヒル）も為サるゝ事あれども目に見ゆる時ハ敵船にて防キの手当て仕易キ故寄手の方に損あり此故に夜の働にせるを専とすべし

○夜討して首尾好大船江飛入ある時、暗（ヤミ）にてハ不知按内の船中働難かるべし然ル故に戦士敵船江飛移らせ我ヵ船より早ク松明を燃

して敵船の中を照ス様に為べし其法はミへとも戦士二十人乗りの船なりとも水主は十人なるべし敵船江押付ケて戦士挙登の時十人の水主の内五人は兼ての役定メにて長サ二丈余の松明を一船に十本づゝ用意仕置て戦士敵船江はぐて附クを見て五人は艪(ロ)櫂(カイ)を捨て彼の長松明江火を移し戦士敵船江飛入ト見ても早ク長松明を敵船の船端江指上ケて船中を照スべし一艘の小船より五本づゝ指上ケて五十船にて五十本燃ス時は敵船の中は随分明白なるべし燃レども是ハ一時の明(アカリ)をなすものなり後ゝは段ゝ人数を繰上ケて松明の役に船中にて松明を燃して戦士を助クへし何レも取懸ル初メに能く役定メをも約して呑込セ間ちがひのなき様にして働キ懸ルへし

○小船数艘に水練の達者数十人を乗セて敵船江忍ひ寄水を潜(クヽ)て敵船の船底(ソコ)江穴を穿て

水ヲ入しむる術あるべし其法水練毎ニ桶(オケ)ヲ瓢(フクベ)を頭(エリ)ニ付両手ヲ働カせても頭の沈マざる様ニ為べし扨筒鑿(ツノミ)ト鉄槌(カナツチ)とを持て敵船江寄附て手の及ブかぎり水底江彼ノ筒鑿を打込べし既ニ船板を貫て船中江水の入ル時ハ筒鑿の頭江手を以て伺へハ水の入ルハ指を吸入ル様ニして能知ルもの也其時鉄槌計持て早ク逃去べし扨一船ニ水練二十人乗て十艘を設クべし五艘ハ左右より忍び寄て水練(スイレン)毎(コト)ニ悉ク穴を穿(ウカ)チ終(オホ)せれハ二百穴を穿ツ也如何なる大船なりとも忽チ沈ムべし西洋の海賊此術を施ス者ありと聞及べり但シ西洋の大船ハ堅実の丸木を以て船を造り立ル故鑿の力及難かるべし只唐(カ)山(ラ)暹(シ)羅(ヤム)等の板を以て造レル船ニ施スべし鑿の形ハ左のごとし



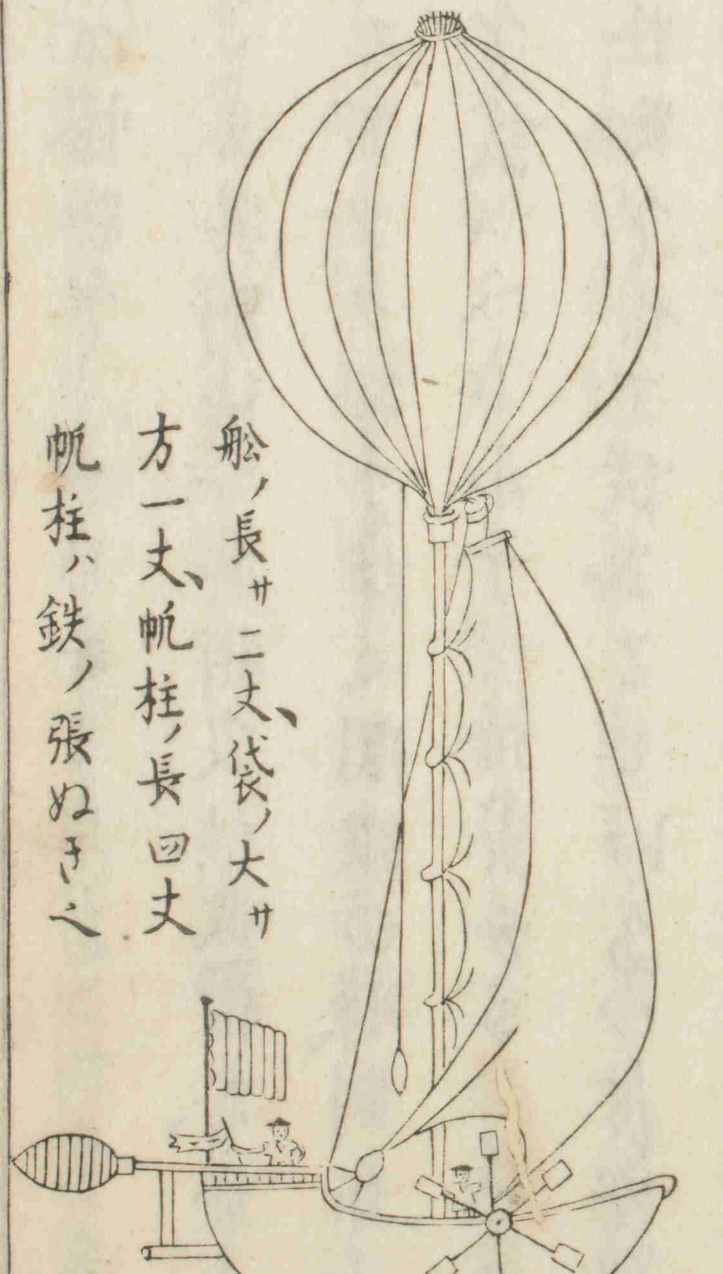
筒鑿

右の數條ハ我ヵ小舩を以て異國の大ミ舩を挫ク方術に上下一致して能教諭鍛煉あらバ遠ク歐羅巴江押渡ルとし後レをで取まじきに況や遠ク此國江来レル異舩をや然レとも上ハ教方なく下ハ鍛煉なくんで亦復空談ト成べし、ゆるかせニする事勿レ〳〵

㊃異國人ト戦フニ第一の心得あり段〻言ニレ如ク異國人ハ血戦ニ鈍き故種〻の奇術、奇巧を設て互ニ人気を奪ウ事を勤トス其國人同士レハ覚悟もある事なれども其事を不知日本人ハ彼ノ奇術ニ逢バ恐入て実ニ膽を奪（ウバ）レ臆病を生レて　日本人ハ持前トする血戦も弱くなるに小西大友の輩是に小子接ニ其奇術奇法ハ何レも繰（カラクリ）ニして武の真用なき物なれバ其奇術奇法を少も不恐して只一向（ヒタスラ）ニ切込を第一の心懸トすべし必ゝ奇術の仕懸物ニ臆スル事勿レ心得の為ニ其奇術を下

に記ス○火矢（火燃ル処ゝに）○神煙（煙立処ゝに）○毒霧（晴天に霧起ル）○火禽（数多の火の玉中天を飛）○火獣（数多の火の玉、地を走ル）○八面炮（八方江飛出ル鉄炮）○水底龍王（水の底にて雷の如く鳴）○地雷（地中にて雷の如く鳴て火 火ゝ地上に燃出て人を焼之）○理圍古突悉吉不（リユクドレキツブ）（中天を鳥の飛が如く自由自在に乗廻ス船なり○理圍古突ハ気の蛮語、悉吉不ハ船の蛮語、気で乗ル船ト云事なり）

右の外猶幾許もあれど皆実用なき物之中にも此船を別て恐ロ敷、物の様なれども是亦無用にもなき物之若（モシ）我が軍上を乗バ鉄炮を以て帆柱の上に在、風袋を打抜悉く気漏レて船落ル之生捕て弄ブへし然レ共怪物を見馴ざる人ハ見慄（オヂ）して臆病を生スる之此故に異國人ト戦ハ是等の物に恐ルなト云事を戦の度毎に能々諸軍に示スへし



理圍古突悉吉不之図

船ノ長サ二丈、袋ノ大サ方一丈、帆柱ノ長四丈

帆柱ハ鉄ノ張ぬき之

右数多の怪物を　日本に用たる例を未タ不聞、然とも其制法ハ兵衡及ビ武備志、亦ハゲレイキスブック等に詳之閑暇の時、制作して其実否を試むべし小子ハ清貧なるが故に此数多れ怪物を作て試ルことあたハず空ク後賢を待而已

此下、世間並の水戦法を記スのミ嚮（サキ）に所謂、小船同士（ドシ）の小排合之

○水上の戦ハ陸地の覚悟にてハ相違ある事

之先大槩を言フ時ハ第一、船の進退自由ならず一身の駈（カケ）引も思フ儘に仕難キものなれど第一に船を自由自在に為ルにあらざれバ不叶事之船を自由自在にする事ハ揖（カヂ）侯（ミ）、揖取（トリ）等を撰ブト船の制作を精クするト平生操練を能（ヨク）するとにあり右の了簡なくして急に水戦に取懸ル時ハ陸地の戦より一手際（キワ）悪キもの之ト言リ然ル故に異國にてハ水塞ト云て海邊肝要の處に平生、船手の軍士を備置て時ヾ

津ゝ浦ゝの船を集メて水戦の趣を操練せさる事ある之今に朝鮮よりも處ゝに水営を置て其敎令能整しりと聞及ぬ是等の事ハ羨へき事なる哉

○船役トいふハ知行高に應して軍船を出サせる事也此積りに家ゝ國ゝの定メあり亦山國水國の差別もある事なれは一定の事ニ言難し大畧を心得居て國土の宜キに隨フへし亦國に因て商賈の船も軍用の時ハ大小船と

もに悉ク國主江指上ル掟もあるなり何レに宜キに随て定むへし

○船軍ハ大小船を組合スル事也大ハ正兵ト成て敵に當ルを主とし小ハ大船を助けて奇の働を為へし

○大船小船の利を辨せる時ハ大船ハ乗廻して自余の小船を乗沈ムルに宜し飛道具を備て敵をなやまはに宜し石を落して小船を苦しむるに宜し大筒を仕懸ルに宜し都て大

洋江押出ル程大船ニ利多シト知へし

○小船の利ハ軽く數往来するニ宜シ大船ヲ助て奇の働をするニ宜シ急の援兵ニ宜シ二三十目の大筒を仕懸ケて大船の横腹、水ニ入ル所を狙ひ討ニするニ宜シ物見ニ宜シ火船ニ宜シ是皆小船の持前之

○異國ニハ楼船ト云て船の上ニ三重の楼を構て戦士を夥ク乘（セ）て水戦を為ス事あり此船ハ水戦ニ利多シト云り　日本ニ今迄楼船

の制ある事を不聞ト云ども志ある将帥制作あり度事也たとひ真の楼船ニあらずとも楼船の心持ニて制作ある時ハ水戦ニ利多き事なるべし

○楼船ハ云ニ不及、大小船ともニ楯を用て矢炮を防くべし別して大将の坐ト揖（カナミ）候、揖取の居所ハたしかニ囲フべし但シ船楯（タテ）ニかけてはしれ自由なる様ニすべし

○米穀塩噌の類、船ニ應して積（ツム）べし大船ニ米

薪の類ヲ積ニハ一重米、一重薪ト段々ニ積入ルベシ

○艪のもや緒ハ鎖ニ為ベシ敵ニ切られぬ為也

○揖候ハ切者ヲ撰ブベシ扱始め、ひらきの相図ハ言語ニて演ル事なられ鳴物の相図ヲ定ムベシ、なるべくハ鈴ト鳴子トヲ仕懸置て面揖ハ鈴、取かぢハなる子、両方一同ニ鳴させて真艫ト云様ニ定ムベシ但相図の鳴物ハ心次第なるベシ

○艪榜ハ定りの外ニ余計ヲ用意すベシ損シなる時の用心なり

○船ニ應セさる大旗ハ立ル事なかれ重クシて船不自由ニ成シ其上大風ニも負ルハ只目印迄ニ一本ヲ立ベシ但シ将机船ト樓船トハ軍威ヲ示ス為なれど旌旗の数ヲ立ルものハ但大将別船ニ在ル事ハ心次第なるベシ

○取合ニ成てハ艫艪三四五挺のミ立て余ハ

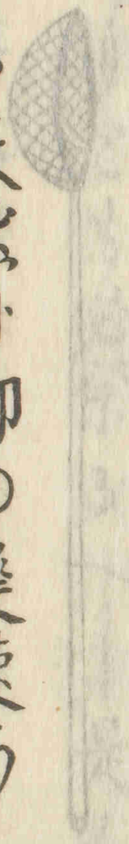
悉ク揚ル之

○舳(ヘ)先ト艫ニ心丈夫なる者ニ打鈎を持セ置て敵船江打懸させべし近ク引寄セたる時ハ態手鑓等を打懸て乗移ルべし打鈎の図ハ初ニ出

○都て船ハ片寄りニなりても乗かへらぬ様ニ御志とゝのるべし其仕形試ミて善を用べし

○水主の者どもニも平日ゟ鉄炮を数置(オキ)取合ニ成て艪櫂を揚たる時ハ水主ニも飛道具の働を為サせむべし

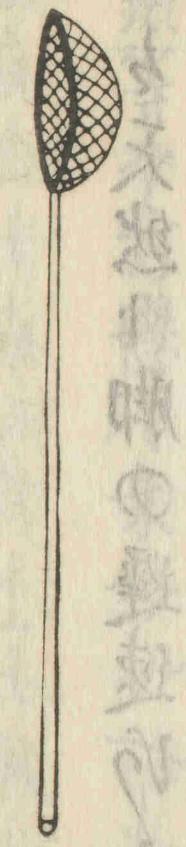
○小船ニ帆を上て大風ニ走ル時ハ乗返ス事あるゆへ艫ニ席(ムシロ)を下(サゲ)て水ニ引ク時ハ乗返サずと云り



○船ニも天然ト脚の遅速あるもの也尤制ニ因て遅速もあるゆへ何レニも遅ニハ艪櫂を増速ニハ減する也

○鉄たもを船毎ニ用意仕置て松明を燃レ赤

ハ炮烙火を敵船江擲（ナゲ）入へし亦敵より此方の船江擲入たる時ハ此器にてすくひ返スへし、たもの網を針金にて拵ル也其形左の如し



鉄たもの図

〇柁（カヂ）の折レたる時ハ艣（ロ）櫂を二三挺、艫（トモ）の左右に立て結付ル時ハ船覆（クツカヘラ）さる也此外舟楫の事に習たる船方の者に尋問て猶精妙に至ルべし

〇湊、川口等江入ルにハ敵に臨ム如ク思フへし先ツ物見を遣レて陸地迄も探て後に船入すへし必卒尓にする事なかれ

〇出船、帰船ともに必船魂（タマ）を祭るへし其身不信仰なりとも必祭るへし是人心を安堵せしむる權謀也

〇剎木（ソキ）、片板（ヘギ）、まきはた、鉄搥（カナヅチ）、煉石灰（レツクイ）等毎船（マイセン）多ク用意すへし船を鉄炮にて打抜（ヌカ）れたる時早ク塞クへき為の具也亦そき木に綿（ワタ）或まきは

の類を纒（マトイ）付置て大筒にて船を打抜（スカ）れたる時早く此物を押込ミ其上江板を打附、石灰（レツクイ）にて塗塞くへし皆一時の急難を救ふへし兼て水主の中にて此役定めを致し置へし

○船の舳先を鉄を以て鉄（スルト）に張り固め敵船に横腹江乗懸ケて板を乗割ルへし

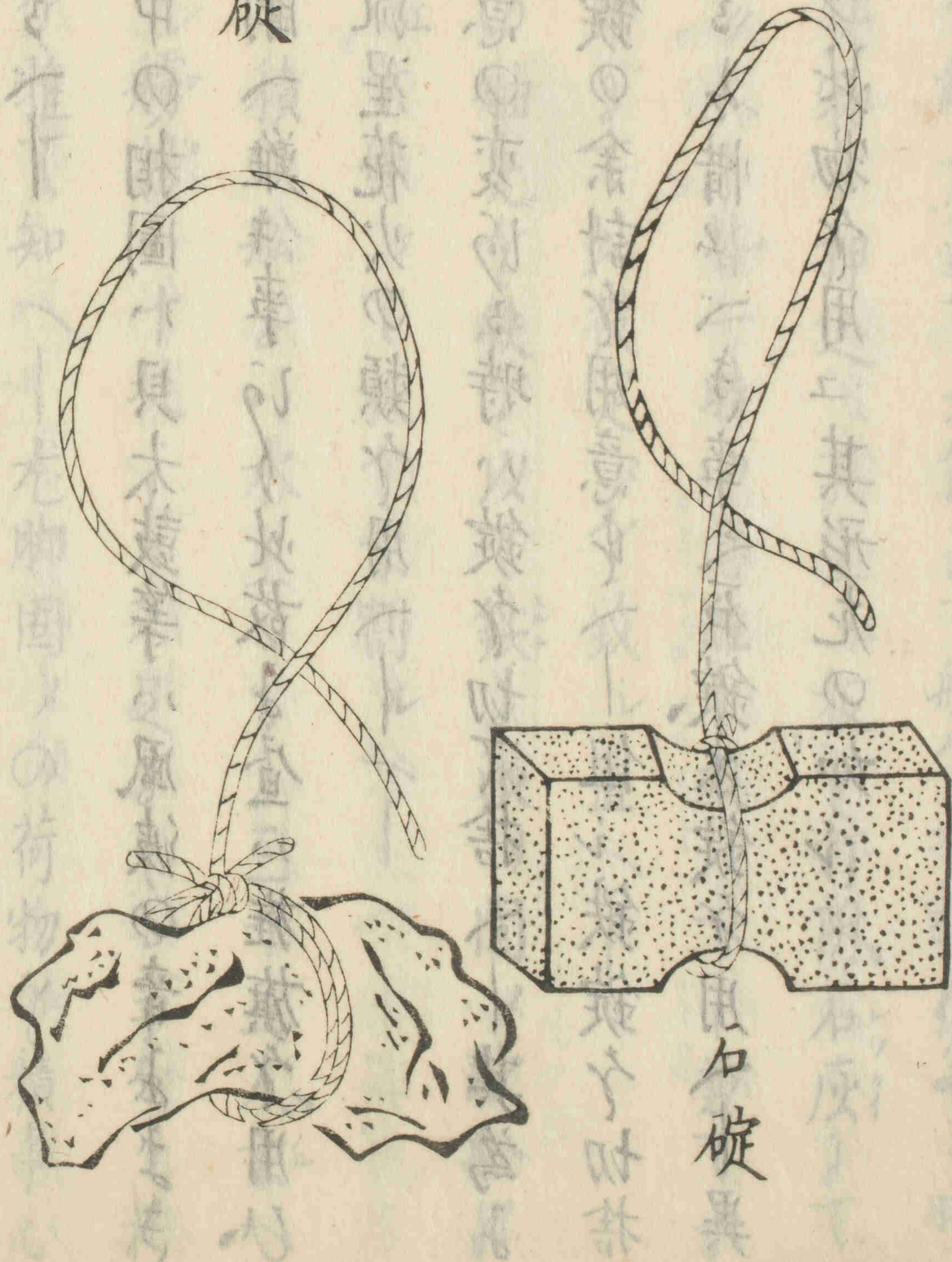
○百石積の船にハ水主ともに三十五人、乗（ノル）へし但し艪（ロ）櫂（カイ）ハ十挺より不足になる事なかれ

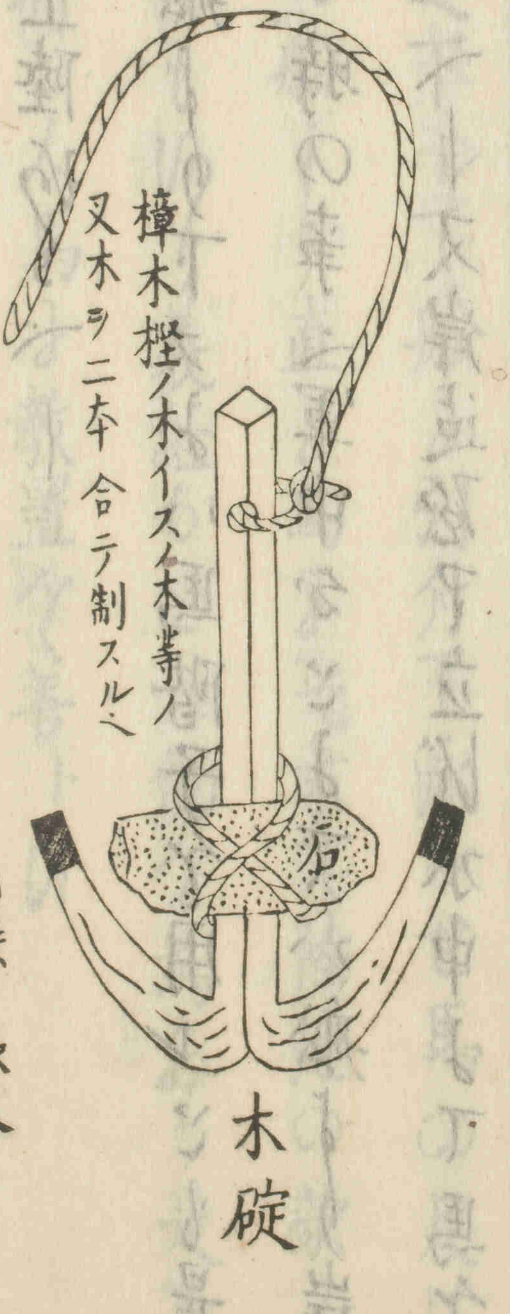
余是を推て知へし尤脚固めの荷物を積事心得あるべし

○船中の相圖ハ貝太鼓等ハ風波の音にまぎれて聞へ難キ事あり此故に昼ハ旌旗を用ひ夜ハ流星花火の類を用べし

○火急の変ある時ハ錠を切て捨へし其為に毎船錠の余計を用意すへし但し鉄錠を切捨にするを惜ムべき事ニ石錠、木錠を用へし異國多く此物を用ユ其形左の如し

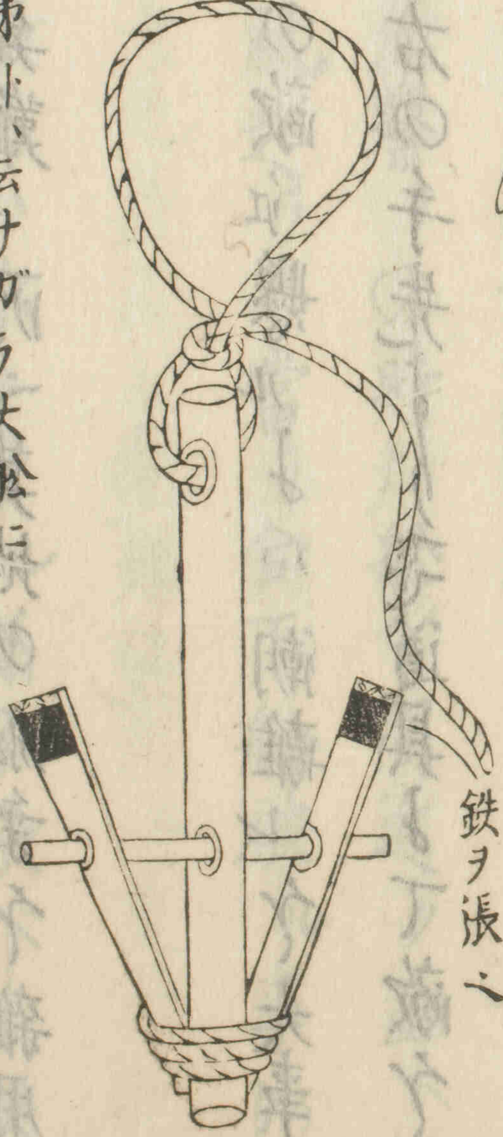
石碇





樟木樫ノ木イスノ木等ノ叉木ヲ二本合テ制スル之

木碇



木碇

大小心次第トハ云ナガラ大船ニ用ルハ長サ三間余之平生ハ潮入ノ泥中ニ埋メ置之唐山人多ク此錠ヲ用

○國の地勢に因て風の出ル方角なるもの之他邦の人は知難き所之其地の船乗を雜用べし

○船より陸の敵江懸ルにハ潮離レを大事に為スべし左右の手先より飛道具にて敵をせくめて上陸あるべし

○馬を船より下スにハ馬階子を用レども是ハ寛（ユルヤカ）なる時の事之軍中などにてハ船より岸江飛昇（ノボ）スべし又岸迄飛て立ば水中にて馬を船より追下して船に引付て泳がせ馬の足も立（タツ）所にて船より直に馬に飛乗て陸地の敵江打懸ル事もあり義経なども此働を為せり是等の業も時々人馬に教置を善トす

○洋中にかゝり繫りの時ハ船を間近ク並べ繫ル事なかれ風起ラば當り合て船破ル事あるべし

○船江幕を張にハ水に浸ル様に張べし矢炮を受留ル事ありと云り

○船中に用意すべき品々左の如し猶工夫の上損益あるべし

一方針　遠眼鏡

長柄の鎌　長緒の打鈎

長柄の熊手　鉄炮も

大筒　弩弓

松明　流星花火

石大小　火薬並油類

乾き柴萱

右の外塩噌米薪の類ハ言に不及事之是迄軍船調度の大畧之此下戦法を載ス小船小挊（ぜり）合の事ハ此段を見て知べし

○船備ハ物見船を真先に出して敵の様子を見切ルべし尤四方の物見油断ある事勿れ勿論物見船も飛道具又ハ相圖に用ル旗旗花火の類を持乗べし

○軍船ハ小船ありとも一艘切にて獨働きれ

なる様に心懸べし此故に毎船飛道具打鈎（カギ）其外都て戦具用意有るべし、扨又小船にて水主ともに三十五人乗の船なりとも飛道具も三十五用意有るべし、敵間（アイ）遠きハ飛道具にて悩（ナヤマ）し近きハ打鈎を打て敵船を引よせ手詰の勝負有るべし

○船備ハ人数の多少ト船数トに随フ故、備の次第定メ難レトいへども一備の船、二十艘にても不足になる事なかれまじぞ備立の次第ハ二一

二れ先手、左備、右備、前遊軍、旗本、小荷駄、後備、後遊軍なとゝ立べし然レながら始メにも言レ如ク人数の多少ト船数トに因ル事なれど是等を定法とハ云難レ臨時の制ニ出べし但レ船ト船との間ハ船ながけ除（アケ）備ト備との間ハ備ながけ除置べし此如ク為ざれバ込合て働キ難キものなりト言り勿論湊川口等に懸ルにハ猶更に船を間遠に置べし間近レバ火船の恐レ有り

○敵船を悩スにハ十匁より二十目迄の筒を以て敵船の横腹水に入ル所を打抜て船中江水の入ル様に為へし此働ハ小水戦にも肝要の働之

○大筒を放ス事、小舩にてハ叶難し大船に幾（イク）位（カラ）も仕懸置て拍子を見合て嚴く打懸へし但小船にも一二三十目の筒、一位（カラ）迄ハ仕懸らるるもの之但し百石積の船に五百目の筒を限リトハ為へしと云リ

○前に言こし一艘にて獨働をせよトいふハ一箇の覚悟をいふ之全躰の法ハ或ハ二三艘又ハ五六艘を一組トして進退離れず相互に奇正の働を致スへし

○敵船ト見てハ無二無三に乗懸ケて打鈎、熊手等を打懸ケて乗移ルへし

但し味方の船只一艘にて敵ト取合フを見ても何レありとも其船に近キ味方の船二三艘漕（コギ）附て戦を助クへし

○一艘の働前は初に言し如く水主ともに三十五人乗の船なれハ武者二十五人也（水主十人）其中一人、船の長を定て一船の事を司ラしむへし扨武者廿五人なれハ十人ハ鉄炮十五人弓にて敵船を見てハ嚴く打すくめ、近付くを鉄炮の者六人、水主二人ハ持前の態（ワザ）を捨て打鈎態手等を打懸ヶ敵船を引寄スへし其時残りの武者飛道具を捨て敵船江乗移り手詰（ツメ）の勝負を決スへし大人数なりとも此法に准シて働前を定むへし

○敵船を追にハ敵船の水主を打へし敵船江乗移りてハ早く艣の早緒を切へし

○平生の操練に武士足軽ともに艣（ロ）櫂（カイ）棹（サホ）等の遣ひ様を能教置（オシヘ）へし上にも言し如く敵方にても此方の水主を目懸て討（ウツ）もの也その時戦士艣榜の事に熟シ居ル時ハ水主を不レ殘、打殺されても船の進退等に苦ミさるもの也此教、水戦の要法也怠ル事なかれ

○大船ニ樓ヲ二ヶ所構、四方ヲ厳ク囲イ其敷
板ニ鉄炮ヲ入ル程ニ刻（キザミ）ヲ十宛刻ミ置、其刻
ミ江鉄砲十挺宛入レ置テ是ヲ一人前の受
取ト為シ敵船江近付たる時人ゝ受取前の鉄
炮十挺ヲ取替〳〵厳ク打せしめて敵船ヲ乗
取へし但シ自余の葉武者船江妄リニ此働ヲ
為ル事勿レ、よき敵ト見切て此働ヲ為て敵ヲ
打取へし扨敷板ニ刻ミヲ付て鉄炮ヲ置事ハ
船動揺しても轉動せぬ為之船櫓（ヤグラ）の制ハ上ニ

出ル五十間船の形ニして小ニ造ルまでの事
あり

○大船ニ大小の弩ヲ相交て仕懸置、大ハ以て
敵船ヲ破リ小ハ以て人ヲ悩シて敵船ヲ乗取
へし

○船櫓ニ火桶（オケ）ヲ夥ク仕込ミて敵船江推附、敵
の頭上より擲懸て色めく所ヲ乗取へし、火桶
ハ陶器（ヤキモノ）ニて擲入（イル）レて砕ル様ニすへし

○大船ニ石ヲ夥ク積置て自余の小船江落シ

懸て悩スへし
○大風の時ハ前後左右の物見必油断せさる事勿レ敵我ヵ上風より火船を放ス事あり慎むへし用心すへし
但し火船の用心とて別に仕方もなき事之第一に物見船、第二に大船の傍毎に小早船に武士を乗せて備置、物見船より火船来ルト相圖あらハ此小早の武士とも早く漕（コキ）出して火船の我ヵ大船江押付（ツカ）さる以前に途中にて乗取（トリ）早ク柴萱等を切なくして海中江打入へし、第三ハ諸器物に水を汲溜て大船毎に船端に並へ置て火船来ラハ厳ク水を灑キ懸へし、第四に大錠綱を切捨て船を風上江轉ズへし火船を防ク術、此四にあり能く心を鎮（シヅメ）て大丈夫に働へし実に武士の精神の見（ミユ）ル所之慎へし○此下船中の法を記ス
○敵船を乗取たる者ハ上功へ

○敵船ト見て無二無三に乗懸ケたるハ其一船全躰の上功へ

○あやしき船を捕得たるハ上功なり

○能打鈎を打たる者ハ功とす

○大筒にて敵船を打破りたる者ハ功とす

○敵船に囲（カコ）まれたる味方の船を救ヒ出したるハ功とす

右賞法

○船中の武器船具等ハ船司の持前にて日ゝ改メ見るへし破レ損したるを早ク取替へし油断して軍事に事欠キたるに於てハ其船司罪あり

○船より陸に上りて水穀薪菜等の用を弁するにハ船司より印しを受て行へ勿論、帰船ハ刻限、一時に限ルへし遅くなる者ハ斬

○番船物見船等面ゝの役目を怠ル事なかれ怠ルに於てハ斬

○趣意なくして己レか持前の場所を離散し

或ハ妄リニ上陸せる者ハ斬
○味方の船ハ何レト云事もなけれとも
別レて同船同士ハ兄弟の如ク親ムへし聊
も喧嘩口論等を致ス事勿レ万一止ム事を不
得事あらハ先鮮陣の後、言上して理非を糺スへ
し其場にて相討ツ事勿レ犯ス者ハ双方斬
○繋リ船の時、列を離レて他所に繋ル事なか
れ背ク者ハ其船司斬
○敵船ト見ても臆して乗懸さる時ハ船司は

云に不及、揖取水主迄も斬に等き罪あり
○厳ク敵船を追フ時ハ敵れ謀にて種々の物
を取落ス事あり必拾ヒ取事なかれ若拾ヒ取
故に敵船を取逃さハ其船司斬
○潮気にて火薬湿（シメ）ルものへ心を用て度々乾
スへし若怠て火移ラさる時ハ其船司職を剥
○首を取事を心にかけず敵船に追付事を主
とすへし若他船ト首を争て敵船を取逃シた
る時ハ其争ヒたる者及ヒ船司皆罪あり

○船中高聲を禁ス犯ス者ハ罪

○船具を弄ブ者ハ罪

○酒を飲或ハ賭の勝負事を禁ス犯ス者ハ罪

○船中の兵糧ハ其船〻にて炊（タク）もあり亦兵糧船を廻ス事もあるなれども先法ハ一船切に炊を善トする事也

右開巻より是迄の数條にて海國の備、水戦の法ハ事足レりといへども此下、水戦に附ての諸用を記ス猶工夫を加ふべし

不亀手（テカヽニサル）の方（水戦第一の要薬なり）

○櫟木（レキミ）の油を取て惣身に塗べし○又酒三升に胡椒（コシヤウ）十二匁ヲ入て少〻煎じ手足に塗妙なり右寒國江働くに別して用意をべし

溺死（ミゾオボレ）を救ふ方

○山雀（ヤマカラ）發羽（テモ）ニ羽ともに黒焼にして水に和し惣身に塗○又石灰を水に和し惣身に塗てよし○又生明礬の粉を鼻中江吹入ル忽チ水を吐出して活○又皀角子（サイカチノミ）の粉、絹に包ミ肛門（シリノアナ）中

ニ入レ關元、百會の二穴ニ針灸ス忽活
右何レも一病を経ルをも活スなり

湯火傷（ヤケド）の薬

○杉（スギ）木ノ葉黒焼細末レ鐵漿（ハグロ）ニ和レ傅○又石（セキ）
膏末（コウノコ）、胡广油ニ和レ傅○飯を黒ク焼て胡广油
ニ和レ傅○胡瓜（キウリ）を細カニ搗爛（ツキタヽラ）レぬり付ル○
又人家、庖厨（ダイドコロ）を流ス塩味（シホケ）のある下水中の泥ヲ
付てよし○白粉ヲ卵白ニ和レ付テよし

悪風を知ル口訣

○雲横ニ多か引て日色赤キハ悪風あり○月
朦ゝとして暈（カサ）あるハ悪風あり○太白星、見
へ難キハ悪風○西南ニ参星動揺（ウゴク）するハ悪風
○諸の星ひら〱として動ク様なるハ悪風
○雲行早クして箭（ヤ）の如キも悪風○禽鳥の高
ク飛ブも悪風○天色ふかの曀（クラ）キも悪風○人身
頭熱つするハ悪風ありと知へし

右候風の大畧之此下合戦の方ニあれバか
らされども心得の為ニ唐、阿蘭陀等の船

の称呼又ハ其船々ニ居ル役人の職名を書記ス是又臨時の博識ニして一急用を弁スへき歟

○唐人船を呼て船(レセン)ト云又鵬(ホウ)ト云其船ニ名ル事何々鵬ト云（日本ニテ何々丸ト名ツクルカ如シ）日本ニ云傳馬船を杉板(サンハン)ト呼之㊀唐船の三役人ハ船(レセン)主(レキ)夥長(ホイチヤウ)總(ツウ)官(ツオンクハン)之此三ツハ唐船の頭役之㊁阿蘭陀人ハ船(フチ)を呼てレキツプト云傳馬船をバツテイラト云阿蘭陀船の三役ハオツフルホウフトン之(カビタ)レケツプル（船頭ナリ）オツフルステユルトン（按針役之）此三ハ阿蘭陀船の頭役之

○初発より茲ニ至てハ小子が千古獨見ニして　日本ハ武備の綱領斯ニ在ト竊ニ誇ル所之然ト云とも文面而已を悦て器械を不具ハ善の善ニ非らず又器械を具ても操練なきハ亦善の善ニ非らず文面を能會得し器械を備操練を善して而後始て善の善ト云へき也都て軍事ハ陸戦なりとも操練なき人数ハやゝ

ら戦に成事多し況や水戦ハ船の懸引も一身の進退も不自由至極なるものなれど是非に操練なくて不叶事也、然ル故に水戦の操練ハ操練中の又大切なる操練也ト知へし必ゆるかせにする事勿レ然りと云ども一向に操練而已に泥ミても亦血戦に鈍くなる事あり能彼是の交を呑込て操練、血戦二ツながら全きを妙ト為へし扨既に海國水戦の義を述し上ハ亦畧陸戦の事をも詰へし因て第二巻より十六巻迄を書記して以テ大小戦闘の大較を示ス讀者忽に為事勿レ

第一巻終

千部施行

海國兵談第二

陸戰

既ニ水戰を會得せハ陸戰の法を呑込へし

先戰法ニハ戰闘の法組ニ　日本諸流の戰法ハ大槩法組極りて鉄炮弓、長柄、武者ト四段ニ立て六十間より三十間程迄鉄炮ニて持合、それより十四五間ニ詰ル迄弓持合それより長柄の持合ニて鼻突ニなりハ、そこで武者の勝負ト切組大槩定りぬる　當時頃ハ世人多ク

ハ此切組の外、合戰の次第ハなき事ト思フ人も多けれども接戰の懸リ口、是のミに限りぬる事なし、稀に切組を違へぬる敵に出逢だる大に狼狽ル事あるへし惣て軍ハ先を取にあり、先を取事ハ人の膽を奪にあり其法六あり下に記ス異國勢の備を碎にも猶この術を施スべし

○敵當世流の備立にて楯をも不用、押來ル時ハ兩懸り然ハ、手詰懸に宜し亦楯を用ヒ云ス鉄炮を嚴ク備て押懸ラば玉碎に如ハなし、亦敵楯をも不用鉄炮のミ數千挺備て押懸ラば指矢懸に宜し亦飛道具を影ク備て押懸ル時、味方に飛道具も不多、楯もなく其上無勢なる時ハ乘崩に如ハなし、亦何レの備をも押崩ス車懸の法あり但し平場にのミ用る之

○兩懸りといふハ楯を一面に突並、其陰に云、鉄炮を等分に組合セ鉄炮少々打懸なから押詰て敵間十四五間に成ぬる時、鉄炮を一しきる

へに打懸、弓ハ矢接（ヤツキ）早（ハヤ）に一筋ヅヽ射懸て敵を射立ゝはしひるむ所を足軽の後（ウシロ）に扣へ居る武士、得道具を打振て前後を不顧、踏込ゝ切立べし弓鉄炮の足軽も皆其持道具をとつてくに懸て武者に續イて切込也是を两（モロ）懸りといふハ弓鉄炮の两懸トいふ心也

○手詰懸ト云ハ是も楯を一面に突並て膽氣（キモ）壮（サカン）に力量ある者二三十人、六七十人、乃至一二百人も撰て各大太刀、太棒、大薙刀等を持せ置

敵間三十間許（カリ）に成ける時、楯持、足を早めて無二無三に敵間三四間に押詰て足を踏止ける時楯の陰より件の壮士、少人数ならバ一口、大人数ならバ二口も三口にも成て剛氣無慙に敵の中江割て入縦横無碍に切立べし後勢足に續て驅立ル也是味方に飛道具なき時の懸り口に殊に宜シト云り

○玉砕トいふハ、楯を一面に突並、飛道具に大筒（ツヽ）を雜へて備置、小筒を四度（シド）路に打懸なから

敵間十四五間に押詰べし此時有合大筒を一そろへに發し懸て敵の膽をも冷しめる所江小筒を一齊に打懸て愈（イヨ〳〵）敵のひるむ所江烟（ケフリ）の下より武者も足軽も無二無三に切込て乗越〳〵進む時ハ敵を破ル事疑なし扨又道具の數ハ人數の多寡に隨フべし大筒ハ鉄筒鉛玉ハ重クして取廻不自由也此ハ短町の場にて敵隊を碎ク迄の事なれど木筒煉玉を用べし是軽クして便利也制法ハ器械の巻に出せり見合スべし

㊇指矢（サシヤ）懸りといふハ敵鉄炮を影ッ先に立て押懸り味方を打ひくむるをしるとも此方にハ射手數百人を揃て矢種を惜まず指矢に射懸ケ敵を射すくめて鉄炮を放サしむる事なかれ其時左右よりて横を入て破ルべし此指矢懸りハ弓家第一の働にして鉄炮打ハ面も振向（フリムケ）難き懸り口なりと聞傳たり

○乗崩しといふハ敵又道具を影ッ備て透間も

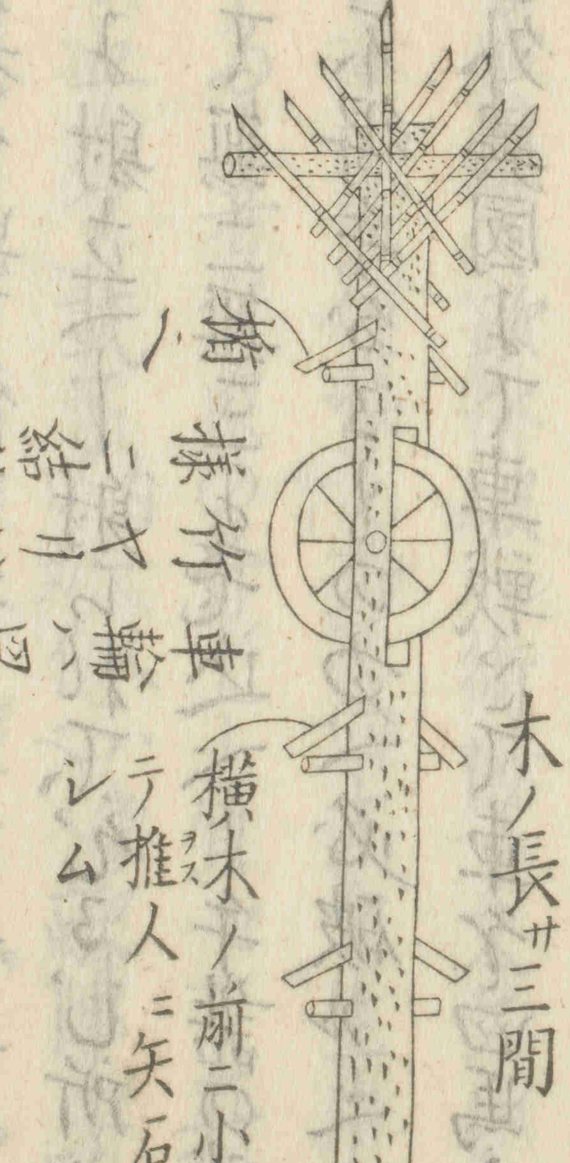
無押懸ル時味方ニ飛道具不足なる歟亦小人數なる時ハ尋常の如ク軍立てハ必打負ルものなり其時ハ乗崩ニ如ハなしト其法はよき馬を前ニ立て二三十騎又ハ五六十騎乃至百騎二百騎なりとも君の大事此一戦ニありト命を塵芥よりも輕シ忠義の一念ニ軍神を勧請仕奉て前後を不顧無二無三ニ敵の隊中江乗込へし是ニ續ひて歩兵も切込之馬の入様三等(ミトオリ)にあり左ニ記ス

騎馬の三十も五十も一隊ト成て敵隊の真中江乗込之是を一口入ト云又二隊ニ分レて備の両端(ハシ)より乗込にあり是を二口入レトいふ又二隊ニ分レて一隊ハ敵の正面江乗込一隊ハ敵の脇江乗廻シて横合より乗込(コム)にあり是を廻(マハシ)入トいふ之右何レも馬を入ルニハ人數の厚キ方江乗廻スへし薄キ方江乗込時ハ打殺サるゝも

○車のなりト云リ

○車懸りトいふハ下ニ圖せる所の獨輪（ヒトツワ）の長車を拵て一車を八人ニて推之此車を備ニ應して十車或ハ二三十車も拵て陣前ニ推出し敵間十間許ニちかよる迄ハ静（シツカ）ニ進ムへし扨太鼓の相圖ニ随て無二無三ニ敵の隊中江推込へし人をも馬をも推倒（オレタオス）なり夫ニ續イて武者切込時ハ勝を取事疑なし尤此車の推方ハ能操練あるへし

竹鑓（ヤリ）ヲ乱散ニ結付ル之



此車を推者ニハ足軽百姓等の勇者を撰用べし

○敵より馬入レを為(スル)時ハ早ク場中江出向て馬の前足を薙(ナツ)へし此方の備江乗込レてハ必崩色附ものなりと知へし

○敵長柄を夥ク備て押来ラバ先射手を進メて散々に射立へし射られて、たるむ所江武士抜連レて無二無三に乗込へし手詰の勝負ハを長柄の不得手なるものゆへ必破ルゝ

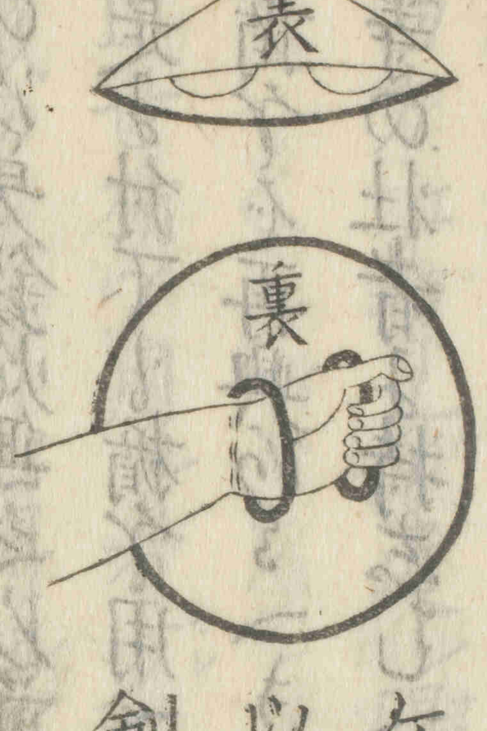
○右の外異國にて車戦とて車を四馬に牽(ヒカ)セて車の上をば生牛皮を以て張固メ其中に十人許(バカリ)載て敵陣江馳込之夫に従ひて騎馬も歩卒も突懸て敵を破ル術なりヌケレイキスブツクに小家の様に拵て四方を生牛皮にて張固メ〆たる者を象の背上に負セて其中に戦士二十五人を載て（内一人ハ象ツカイ之）敵陣江駈込術ゆへ箇様の事ハ将帥の機轉次第土地ト人數トを能計て制作レて用へし兎角合戦の道を世間になき形(カタ)を工夫して勝を取事肝要之（徂徠先生モ屢此意ヲ述タリ）

○敵ト對陣して戦を決セント思フ時ハ先戦地を見立へし地形ハ戦の佐なれバ疎にする事なかれ地形の事ハ九巻目に記ス

◎備を押出スにハ必卒尓にする事なかれ隨分四方江物見を遣し碍（サハリ）なきを知て後に押出へし

◎近世楯を用ル者少（マレ）し是一向に力戦のミを合戦の主意ト心得ルより楯なきを用るハ迂（マハリ）遠（トホ）の事れ様に思て合戦の仕形古より軽薄に成なるゆへなり其上近世ハ鉄炮流布して合戦の次第、鉄炮無之以前より一際（キハ）、むごく成ゆへ是に付ても楯を用べき事良将の戦法なれば楯をも再興あるへき事也扨楯を以て百姓商人等の壮者に持せしむへし此役目ハ只楯を持て前陣に立迫にて合戦に携ル事なれバ百姓、町人等を用て無異儀事なるへし亦一枚楯に穴を穿（アナ）チ鉄炮を貫て直に鉄炮足軽の持（モツ）しなり亦唐山和蘭の戰法に生牛皮を以て笠の

形に拵ゆる楯を戰士毎に持せたる也是にハ昔古手練のある由也其圖ハ左に出ス也此外楯の制作様々あり器械の巻にあり



唐に藤牌ト云、和蘭にハレケルドト云、左手に是を以て面を防キ右の手に劍を以て敵に當ル也

○近世大筒出來して種々の奇術ありと云ども只城攻與籠城にのミ用て放戰に用ル事を不知ハ兵を提ル者工夫して大筒を放戰にも用ひえ手びごき軍立なるべし工夫を加フべし

○双方人數を押出ス時ハ初メに物見を出して能敵の様子を見切、懸リ口の手簡を定メて人數ヲ押出スべし扨敵間五六町に成追ハ平生の足に押行、四町計に成て金を鳴して人數を止て居（オリ）敷しめ新タに太鼓を打て人數を進むべし其法太鼓一聲に一歩（フミ）づゝ進ムべし武（モノ）

閒詰ル程愈此法を嚴ニせへし不然ハ正整せざる也

○敵を踏破て逃ルを追事一町半二町ニて追止ルへし追行時備を乱し足を乱して馳駈せる事なかれ左右を見合し追行へし書経ニ不愆于六歩七歩乃止齊焉不愆于四伐五伐六伐七伐乃止齊焉ト云も聖人の軍法ニして長追を禁しめる事也尤金を鳴サ速ニ是を止へし不止者ハ罪ス

○長追を禁せる事ハ敵必死ニ成て取て返せ死物狂の働をなせる時ハ却て手ニ余ル事あるものなれ也然リ云ども何國迄も追詰て根斷葉を枯ス見切ある時ハ鼓譟して追詰へし義與太閤、西涼州の馬超が働など考見て知べし

○逃ルを追ニ心得あり旌旗齊リ足並も不乱、士卒後勢をかへりみつゝ逃ルハ真の敗走ニあらず虚敗ハ追事なかれ妄リニ追ば伏兵大

返しに逢て却て敗軍せる事あり慎むへし又
旌旗も乱レ足並も不正、兵器など取捨ルハ真
の敗走也追詰て打果スへし

○突懸り強き敵をば己レ虚敗して或ハ伏を
設け或ハ夫返して討取事あり然ト云とも敵
将心得ある者なれバ虚敗の手に不乗もの也
然ル故に虚敗の仕様あり旌旗を乱レ兵器を
捨、高足して走ルへし敵将智ある故却て此手
に乗事あり惣て此類の事ハ将才の活潑にあ
るへし

○己レ虚敗せる時ハ其相圖にハ旗馬印等をも
伏（フセ）てハ起し起しては伏なからし走ルへし尤兼
ての操練に此約束能く教へし

○實に逃る事を恥ト而已おもへるハ戦の道
に暗き故也勝負ハ時の運によるものなれバ
名将ト云とも負ル事もあるもの也其時守返（モリカヘ）
ス見詰なき時ハ逸足出して逃ル事もある也
惣て名将の逃ルハ其逃様甚上手なるもの也

漢の高祖や尊氏卿の逃様をもて知べし然ト云とも逃る事を心懸よと教ルにはあらず時有て上手に逃よと云事なり

○敵を追放て（ハナレ）は其手の侍大将、番頭、昇（ノボリ）馬印を其處に建定メて人数を纏メ手負死人を考へ功の浅深を吟味して悉ク記録し主将の上覧に入べし

○敵を破りたる侍大将番頭江は時宜に因て即時に感状を賜ル事あり亦将士ごとに褒（ホウビ）を賜事もあるべし

○敵を破りて慥に味方の勝利において旗本にて五〻三の貝を吹立て勝鬨を挙べし是軍神を祭ル心にて且軍の勢を添ル術也

○手負には介抱人を添薬を賜ひ討死は子弟無きは母妻女等江跡式無相違申渡し嗣子は後日に公より定ムべし

○先手、敵に追立られんとして進兼ル時は早ク二の見より横を入べし是則奇正の術之既

ニ追崩されて足を乱しぬる時、入レては守返レ難きもの也ト云リ又先手の崩レ色をミて早ク横合より馬を入ルもよし何レニも此方よリ横を入べく見ル時ハ敵の二の見も推出シて相手組もの也其時ハ敵の二の見江目を不懸、味方の一の手ト相手組、敵の先手の備裏を第一ニ蹴（ケ）立べし惣てかやうの働ハ心きゝて神速ニ為べし

○先手二の見ともニ追立られて旗本江崩レ懸ル時ハ旗本の楯を一面ニ突並、楯の陰より長柄を筋違（スヂカイ）ニ半（ナカバ）指出シ石突をも土江突立〆其身ハ居敷て嚴ク固メ崩レ懸ル味方をも一人も旗本江営入ル事勿レ其ひまニ右備ハ右より廻り左備ハ左より廻りて挟ミ討べし亦右の如かる時ハ味方の前遊軍早ク一方江駈込て越働（コシバタラキ）をかけべし越働の仕様ハ味方を追來ル敵の先手をも目ニ不懸、敵の旗本江無二無三ニ突懸リて必死の一戦を遂（トク）べし此働ハ電（イナ）

光（ヒカリ）の如くなる時ハ却て味方の勝利と成之疑フ事なかれ何レにも機轉ト武勇トによりて知べし

○敵より此方江越働を仕懸ル時ハ早ク其様子を見切リ一二の備ハ初の如ク敵に當リ左右の備の中何レなりとも近き方越働の敵に當ルへし勿論、遊軍糺又ハ旗本の人数をも少シ分ル糺して越働の敵江横を入へし

○川を渡ル敵をハ半渡（ナカハワタル）を討へし半渡とハ敵勢半分程川江入ぬる時をいふ之

○押来ル敵を待受て討に六の圖あり一にハ伏を用て討、二にハ中途江出向て討三にハ屯場江着て未タ列を成さる處を討、四にハ兵糧を使ハさる所を討五にハ折着の夜を討、六にハ着陣の翌朝未明に討へし是待軍の大法之

○待軍にハ味方の屯場（タムロバ）に虎落（モカリ）を二重も三重も振置、鉄炮、大筒、弩弓、等を備て待へし

○田單、火牛を用、韓信、嚢沙の計を成、李靖、艾葉

に火を付て諸鳥の足に結付追放て敵の営を焼、范傳に虎の造り物を陣前に押出して敵の馬を驚かして破りたる事もあり此類の事ハ児戯に似たれとも其功甚大之、才覚次第制作すべし

○時宜に因て小荷駄車を真先江推出セル車の蔭より弓鉄炮にて打せしむる事もあるべし敵押来ルとも車に隔られて進得ざるなり其時味方宜き汐合を見済して無二無三に切立ル時ハ敵を破ル事疑なしト云り惣て此類の事猶幾許もあるべし呉人ハ不亀手（テノカヽヌ）の薬を制作して冬の水戦に利を得たる事もあり皆良将一時の謀才より出ル事ト知べし

○何レの戦場江も近習小姓等の中より鑑軍（メツケ）ト志て二人を一組トして二組も三組も遣て其日の合戦の次第又ハ諸軍の剛臆（ツヨシヨハシ）共に記録して大将江上ル又是ハ頭々より申上ル趣ト附合せる組せさる組を見合ル為、又ハ諸軍士

己レが頭の外に鑑軍（メツケ）ありとおもへど一入油断なく戦に身を入ルものなれど彼是の為に用ルなり

第二巻之終

海國兵談第三

軍法付物見

軍法とハ軍中に定メ置所の諸法度之 軍法嚴重ならさる時ハ人数一致の力を出せさるものなり 惣て軍ハ大勢の人数を一身の如ク働かするものなれバ法を嚴重にして縛（シバル）にあらされバ統一ならさるなり 惣て能兵を用ルものハ法を嚴重に立ル之 日本の軍ハ法度粗（アラ）キ故、統一ならさる軍多し 左に法の大畧を

記ス将たる人能會得して工夫あるへし

○貝太鼓ヲ聞時ハ前ニ劔（ツルキ）の山ありとも進ムへし進ミさる者ハ斬弃之

○金ヲ聞時ハ目の前ニ只取（トル）首ありとも踏止ルへし止ラさるものハ斬

○傍輩同士ハ相互ニ危（アヤウキ）ヲ助合へし別して頭分大将分の者の危ヲ見捨ル者ハ斬

○物見の張番亦ハ夜番等ニ當て其職ニ怠り或ハ睡リ又ハ守リ場ヲ立退ク者ハ斬

○血戦の場ニ於て鐘ヲ鳴サさるニ自ラ退ク者ハ斬之

○城攻の時乗へき圖ヲ乗兼ル者ハ斬

○籠城の時妄りニ己レか持場ヲ退ク者ハ斬

○根無言（ネナシコト）ヲ言出して味方の氣ヲ動したる者ハ斬

○敵ト書通又言ニ不及音信贈答し或ハ妄ニ敵ト詞ヲ通したる者ハ斬

○盗首仕（レ）たる者ハ斬

○公れ討ぬは敵を眼より理（リ）不盡（フジン）に争フ者ハ斬

○公用にあらずして妄りに己レか持場を去或ハ陣小屋等を離散せる者ハ斬

○約束の時刻、日限等に遅参の者ハ斬

○私に相争（アラソウ）て高聲シ或ハ刄傷に及フ者ハ双方斬

○妄りに先懸をへからぬ犯ス者ハ斬

○隨身の兵器紛失の者ハ糺の上、斬

○忍足に陣中を通行せる者ハ縛、或斬

○妄に備の中を奔走せる者ハ縛

○妄りに高聲せる者ハ縛再犯ス者ハ斬

○軍中、酒を禁ス、犯ス者ハ縛、再犯者ハ斬

○博奕と云に不及、妄に賭の諸勝負せる者ハ縛、再犯ス者ハ斬

○馬を取放して備を騒動せる者ハ馬を取

○味方に敵と内通の者あるを聞出ス時ハ速に本大将に言上すへし遅くせるに於てハ罪

あり又事に因て即坐に斬

○随身の兵器不調の者ハ紀の上斬、不調トハ弓あれとも弦なく鉄炮あれとも引金損レたる類を云之此類の事悉ク武士の大不覚なるべし

○商價婦女の類ト妄りに詞を通レたる者ハ縛、再犯ス者ハ斬

右罰法の大畧なり猶将帥の心に因、又ハ國風なとにも因て宜ク定ムべし且亦賞

スべき條々あり左に大畧を記ス

○先手敗北して既に惣崩に成べき時守返シて味方敗北せさる時ハ其守返レたる者を上切とス

○敵の主将を討たる者ハ上功之并ニ大将分の者を討たるも上功に准せる之

○懸り口に一番鎗を入たる者ハ上功之

○除口の殿（シンガリ）も上功之

○味方の大将分の首を敵に取レたる時其首

ヲ奪返シタル者ハ上功之亦大将分ニアラズトモ敵ニ取レタル味方ノ首ヲ取返シタル者モ功トセルナリ

○味方ノ旌旗金鼓ノ類ヲ敵ニ取レタル時奪返シタル者ハ上功之

○主人ハ云ニ不及、大将分ノ者ノ危（アヤウキ）ヲ救ヒ、又身命ニ代タル者ハ上功之厚ク子孫ニ報（ムクヒ）ベシ

○川渡リニ瀬踏シタル者ハ上功之

○城攻ニ一番乗ノ者ハ上功之

○主将ハ云ニ不及、大将分ノ者敗走セル時、身ヲ離レズ何國迄モ付纏タル者ハ上功之

○敵方江間（カン）ニ遣シテ敵ノ計畧ヲ聞出シテ言上致シ却テ味方ニテ謀計ヲ為（ナシ）テ敵ヲ破リタル時ハ其間（カン）ニ行タル者上功之

○敵ノ間者ヲ捕得タル者ハ上功之

○敵ノ旌旗金鼓帷幕ノ類、惣シテ敵方ノ武器ヲ奪取タル者ハ功之

○籠城ニ城外江使シテ其趣意ヲ遂（トゲ）タル者モ

上切之

右賞法の大畧之此賞罸を都て軍法ト云ヘ猶工夫不簡して法を立べし然レながら軍法ハ細密ニ箇條の繁多なるハ不好(コノマ)事之只肝要ハ事を箇條少(スクナ)ニ定ムべし扱定〆置たる法ハ少しも相違せる事なかれ都て法令ハ相違のなきを主意トせる之相違ある時ハ法輕クなる、法輕ク成時ハ人不恐、人不恐時ハ法を守ル者無して不齊一ベ不齊一なる兒戯の軍立之ト知べし將たる者法を嚴ニせざれハあるべからず然ト云とも法をも嚴ニすべし我意を嚴ニすべからず福嶋正則ノ如キハ我意の嚴なる故ニ國を失ウト云もの之功疑維重罪疑維輕ト云事、聖人の法ニして意味深キ事なるべし將師たる人是を忘ルことなかれ

物見

○物見ハ軍の肝要なるものにして勝敗の係ル所なれバ可重の第一也まづ物見に大中小の三段あり大物見とハ本大将の直に物見する事也中物見とハ侍大将番頭なとの為（スル）所也小物見とハ一二騎出て物見するを云也

○中物見以上ハ直に取合に成事あり覚悟あるべし覚悟とハ兵器を備ル事なり義貞足羽合戦の大物見なとハ事（コト）を卒尓に為たるによって大変を引出せり可慎又ハ扱物見によって直に取合に成なる時ハ其事を本陣江知する役定メ有べし

○小物見に出なる時、敵によって勝負を望む者あらバ主用にて物見に出なる故、まづ立帰て言上シ即時に馳来て勝負をすべしと云て互に名乗合、且鎧指物等相互に見覚（ミオホヘ）て立別ルべし扱實に立帰て勝負を決する事ハ時宜の見合に因べし不レ立帰ニとも大なる恥辱にもあらざるべし大将の下知次第なるべし扱又初メの如く

釈（ワケ）を語りても敵方承知なく打て懸ラば其時ハ無是非無二無三に勝負を決スへし然レども此仕方ハ十に八九不好（コノマ）事之物見の用を主と為へし但三人なりとも二人ハ勝負を為レ一人ハ立帰て其趣を言上する事もあるへし是亦初メにて帰り役を定メ行へし

○とおき物見ト云あり遠方の所に用ユ是ハ幾所（イクトコロ）にも人をとおき置て段々に申續事なり場先（バサキ）の事を早ク本陣江報スべき為之

○唐山（カラ）、和蘭（オランダ）等の軍事ハ大小悉ク物見を用ル之然ル故に麁忽の破レを取ある事なし日本の軍事ハ物見の事甚粗にして入用の時に計、物見を用ル之此故に戦を善する大将も足本にて不意の動乱を受ある事多し武田が本陣江上杉に仕懸られ今川が旗本江織田氏に切込レある事など皆物見に粗き故ト知へし

○大小悉ク物見を用ルトいふハ備を張て敵

ト戦ヲ取結ブ時ハ勿論之押行ニも前後左右の物見ヲ用ヒ亦陣ヲ取敷て居ルニも四方に物見怠ル事なし其外萬事皆物見ヲ用ヘし是慎之

○深ク敵地江物見ニ行ニは或ハ商人ト成、或は草鞋（ワラジ）ヲ逆ニ着（ハキ）、又ハ獸足ヲ作て着事などもありと云リ扨又物見ニ出て見切の次第ニ習ありて左ニ大畧ヲ記ス猶工夫あるへし

○敵國の貧富強弱、又ハ士民の國主ニ服せるか不服かの様子、或ハ其士大の模儀（カタギ）等ヲ觀察せる事第一の心得之

○敵の虚實ヲ見ルへし虚とハ人數立、不正整、旗の手動キ、軍士妄リニ四方ヲ見廻シ或ハ持ツ所の兵器ヲ玩ヒ、又居敷もせず、或ハ首仰（カウベアオイ）て内冑白ク見（ミヘ）、或ハ武者雜語（ドヨミ）せるハ皆虚之

○實とハ人數立正整ニして皆居敷、又下目（シタメ）して妄リニ五躰ヲ動揺せず、持ツ所の兵器をも不玩、旗の手立派（リツハ）ニして妄リニ聲ヲ立ざるハ

皆實也
○敵地江入てハまだ接戦の足場を見立べし
地形に順逆あり第九巻目地形の條に記ス
○敵勢の多寡を積ルべし是ハ平生見習フに
ありされど積り難キもの也操練の時心を用
て見習フべし
○敵の備れ形を見切べし懸リ口に心得ある
故也備の形トハ魚鱗鶴翼、鋒矢（ホコヤ）等の形を云也
○多騎少歩少騎多歩れ様子を見切べし
○山川險難の場を見切べし
○武間（モノアイ）の町積あるべし是も平生見習にあり
されど見難キもの也心かくべし
○田の淺深を見切べし畦（クロ）崩（クヅ）るゝハ深田也、植
田の並（ナミ）不揃なるも深田也、刈穂の長キハ深田
也都て水國の田にハ深田多ト知べし
○川あるを渡ルべき所を見切ルべし石川ハ
廣平にして大石の無所淺瀬也、砂川ハ直なる
所に淺瀬ありて長刀形（ナリ）の所ハ掘レて深きもの

之泥川ハ狹（セマキ）所深キもの之岩川ハ渟（スベル）もの之是等大槩の見切なりト云ことも様子を知ざる川ハ按内者を用ル事第一の了簡之ト知べし

○伏の籠（コモリ）たる場所を見切べし是亦習あり亦ハ林等ニ鳥の飛騒クハ其中ニ伏ある之獸走リ驚クハ伏ある之飛鳥の驚キ亦ハ行雁（カウカン）列（ツラ）を乱スハ伏ある之、亦藪等の近邊の草を踏藉たるハ伏ある之、草野ニ虫の鳴聲（ナクコヘ）無ハ伏ある之此數條伏を察スルの大槩之

○敵ト對陣したる時ハ敵陣ニ平日立ル所の飯煙（メシケブリ）の多少を能見覺居ルべし常ニ勝（スクレ）て多キト常ニ勝レて少キとハ敵陣ニ何事か支度あるる之能心を配て常よりて多少の飯煙あらバ細密ニ間を遣して敵の様子を探ルべし武田上杉川中島對陣の時武田家の飯煙、常ニ勝レて多キを上杉方ニて見付ケ武田か人數を廻ス事を察知したる事もあり可思

右物見の大畧之上ニも云如ク物見ハ勝

敗レ係ル所なれバ怠ル事勿レ別見レて押前陣取、細道等ハ物見ニ念入べき事也

第三終

千部施行

海國兵談第四巻

戰畧

戰畧とハ孫子ニ云ル所の筭を精クして其上ニて謀慮をめぐらし戰ニ勝べき手あてを工夫して軍をするを云也此戰畧ニうとき時ハ拙き軍を為ル事ある也將たる者能々思慮して工夫を附べし

○戰畧亦た軍略とも云也然ルニ世人軍法ト戰略トを取違たる人多し夫軍法トハ軍中の

諸法度にて相定〆ある掟の事ハ戦略トハ上
に云如ク戦に勝べき手あてを工夫して軍す
る事ハ俗人の所謂軍法ハ戦略なりト知べし
○戦略に精かるべき事を欲せバ和漢の軍記
を多ク見て自然ト會得あるべしト何レにも多
ク先蹤を知て其上に寂然不動の勇機を修シ
得ある人にあらざれバ急速臨時の場にて胸
中より湧出ルものにあらざれども初学の為
に大略を左に挙ルハ猶工夫あるべし

○孫子に兵ハ詭道ト云事ありて接戦の妙境
とせるハ然ルに聖人の兵法を學ブト云人、間
有て此詭道ト云事を殊の外忌嫌（イミキラヘ）ともまゞ不
可争、扨詭ハいつはりトよむ字にて虚言（ウソ）の事
なれども此にて、虚言ハいつはりト見て、適當
せざるハ只軽ク、そでなひ事ト見ルべし其趣
意ハ東を討躰をして西を討、鷹狩（タカガリ）をなし躰をし
て直に軍を仕懸ル事などにて、そでなひ事を
として勝易キを取ル為れ一時の謀を指スハ

○間を用る事皆一時の權謀にして定法なし然と云ども間を用ルの大略を知ざる時ハ用ひがたきもの之孫子に五間を云り郷間、内間、反間、死間、生間、之郷間とハ其郷民を間に用ル之内間とハ敵の身内の者を用ル之反間とハ敵によりて此方江來セル間を却て吾が間に用ル事之死間とハ漏ス間數趣キの事を漏レて敵方江も風聞させ味方にて漏レたる者を尋出して是を殺シ敵に實の樣に思ハせて別に謀をめぐらし流を云、生間とハ間を遣シて敵の容子を見聞せる之生て帰ル間と云事之都て間ハ謀計の主となるものなれバ戦略第一の物と知へし

○夏南を不征冬北を不伐と云事も心得居へし義貞の北國落なども時節遅ハりし故寒気の為に謀相違して敗軍に及へり日本の中にてハ焦ル程の南國ハなき事なれども北國江働く事ハ時節を考合スへし

○早リ雄（オ）にして強キ敵ならバ味方懦弱（ジヤク）の躰をなして敵を驕ラせて討事あるべし

○終日合戦しても勝負決セずして軍を止メ後日勝負を附べしと約せる時ハ、昼の軍に味方の宗徒の者ども多ク討レて味方、大に疲レたて抔ト流言して敵の氣を驕り怠ラせて急に夜討せる事もあるべし

○敵短慮の大将ならバ此方にて無礼の振舞を仕懸て怒りを起サせ無益の軍をさせて疲ラかし其弊（ツイヘ）を討事あるべし

○悠々不断にして懦弱の敵将ならバ短兵急に挫クべし

○怨の事ありて軍を起したる敵ならハ念頭に申まけなとして和睦を取つくろい油断セたる所を討事あるべし

○殘暴にして村里を犯し掠ル者をバ勢（イキホイ）を強大に張懸ケ威武を示して挫クべし

○諸方具足したる敵ならバ軽く、數軍を仕懸

ル事なかれ能工夫して働へし
○大敵を見ては侮こりし事古の勇將にある事にて今の不箇にては少く野猪武者に似タル様なれども敵の大勢を見て臆スル心氣露ばかり生じても其氣持にて取懸ては負ル事疑なし然ルに味方不殘一致して大敵を侮ル心に成て突て入時は小勢を以て大勢ヲ追崩タル例多し何レ二力戰は生ヲ忘レて只死ヽト切込事第一の心懸之謙信清正、忠勝抔是之

○小敵を見て不侮は良將の慎なりと知へし古も侮り輕して小敵の爲に大軍を破られしためし多し能考見へし

○敵地江踏込て戰フには肝要の地を見れまして早クこれを取へし肝要の地とは取ル、時は敵方にて難儀に及フ所を云之或は米倉又は城郭を見下高所、或は運送の道筋、又は大社大寺等之

○戰勝て次第に地を略して敵國江踏込時、我

をたむ処或ハ不従して戦へき氣色ある土邑をハ鏖（ミナコロシ）にして猛威を示し敵國を手に入ル事もあるへし又殺伐乱妨を嚴ク禁して寛仁の德を示し或ハ年貢を薄クする約束なとして敵國を親附せしむる事もあるへし此二ツハ時勢ト敵國の政事風俗を詳に呑込にありてされと弁かたき所あり其大槩を云ハく初メの手合にハ鏖にして軍威を示し其後ハ殺伐を禁して親附せしめ又時宜を見合て折々猛

威を示ス事、敵地を略する大法なるへし只肝要ハ寛猛の德を相兼て時宜に随て施ス事ト心得へし片寛、片猛ハ一方ぎゝなる故、忌事之

○降参ト称する者に真の降参ありて大将を銜（子ラ）ウ爲に降するあり他の味方ト示し合セて裏切する爲に降するあり此外謀計の降参間有之事之詮察スへし真の降を殺ス時ハ見懲（コリ）して以後降参する者無、然ル時ハ地を略し難キ之亦偽の降を助ケ置時ハ害を受ル事あり詳

にそべし是を試ルにハ降将の甲冑等に心を附べし目印になるべき異形の物を着しなるハ必意味あり降人ハ先縦あり切て害を除べし亦偽の降参ト見ても速に領承して或ハ城を受取又ハ人数を奪イなとして其上に彼ノ降人を或ハ撫育しても又ハ畏服せしむる時ハ真の降人ト成事もあり何レに主将の器量にある事也

○敵國江押入てハ其國中に豪傑用ヒられざして爵して時を待者もあるべし或ハ功徳ある者推沈メられて上に恨を含ム者もあるべし亦才智遅ク國中の事を呑込なる者用られざして引籠り居ルもあるべし此類の者を聞出サれ召出レて念頃に持成國土の様子合戦の手だて方略等尋問て厚ク遇スべし大に強を得の道也扨又右の如ク敵國の人を我ガ手下に用ル事ハ其國の士民を安堵せしむる為にも成事也兎角敵國江押入てハ士民怨を生

せさる様にせる事第一也後ロに氣遣（ツカイ）ありてハ思フ儘に敵城も攻難キ事也能考べし

○都て戦の妙ハ奇正を能呑込にあり奇正とハ仕手、脇ト成て働ク事也敵ト相手組を正兵トシ横を入ルを奇兵トス然レども無形にあらされば妙トせるに不足也無形トハ正変シて奇トなり奇、変シて正ト成て敵をして我が奇正を見ル事あたハさらしむる事也扱如此（カク）言ども妄りに奇兵の働をのミ貴フ事にもあらじ元来正兵にて堂々齊々として挫クべき事なれども或ハ人数の多寡亦ハ敵方猛将謀者等にて堂々齊々にのミ擬作（アテカイ）難キ事もあるなり是奇を用ル所也既に奇を用ル上ハ己レが奇正を敵に見透されさる事是無形を貴ブ所也

神武帝の軍立にも陰軍（メイクサ）陽軍（オイクサ）あり是全ク奇正を用ヒられたる也可貴可思

第四巻終

海國兵談第五

夜軍

夜の戦ハ陣所江寄ルを夜討ト云、城江寄ルを夜込ト云、互ニ陣を取て夜出て戦フを夜軍ト云ト世上ニ云習ハセリ其中夜討ト夜軍トハ少シ替レリ夜討ト夜込トハ大なる差別なし

◎夜ハ敵の容子も分明ならざれば足場の善悪、旌旗の相圖も慥ニ見分難ク敵味方もさだかニ知レ難キものなれば諸事不都合なる故、十ニ

八九ハ夜の戦をなど好マさる事也然ト云ども夜討ハ勝難キ敵に勝事あるものなり然レば
カ〻約束十分に調ハされども只彼是（カレコレ）トせしめくどかりにて戦も仕かぬきもの也ト云リ此故に相圖の鳴物、相印、相詞等を能く呑込スへし志まは夜戦の大趣意ハ旌旗の相圖ハ見へ難キ故鳴物の相圖を嚴ク定ムへし鳴物の相圖とハ東西南北の鳴物を定メ教ル事也なこへど椰子木（ヒヤウシキ）を東の鳴物、太鼓を南、貝を西、喇叭を北ト定ルク如シ平生の操練に此趣を能呑込セ置て事に臨て間違のなき様にすべし此外松明（タイマツ）、大煿（ハナビ）等工夫次第定ムへし

○夜戦ハ人数の編伍（クミアイ）を慥に為へし編伍なきかあらさる時ハ引取時敵にまぎれ者附纒フて来ル事あり此まぎれ者を防ク術ハ編伍正キよりゝされども叶難キ也和田楠ハ夜討にて帰て、立スグリ居スグリといふ事を為て敵のまぎれ者を見出シたる事ありしも人数組

正き時ハ立スグリ居スグリにも不及して紛レ入ルべき様なしと知べし

○夜戦ハ人数を二十五人宛、幾組も仕立て各一組切の働を為（ナサ）しむる事甚便利之

○夜討を仕てハ懸りぬる所よりハ不帰、脇ゟ裏かへ切抜（スケ）てかくるべし

○夜討夜合戦ともに戦場より一町許退イて忍備を一備も二備も出シ置べし万一味方敗北して敵追來ラバ己レが備の前を敵勢の半（ナカバ）

過（スギ）ぬる時切懸て踏崩スべし其時引來ル味方も返シ合て挟ミ討之

○夜軍の習ハ前鉄炮の音を相圖に働入べし

○夜討ハ何方より入て何方江抜ルト云事を能諸人に呑込スべし抜（ヌケ）て帰ルべき道江ハ迎備（ソナヘ）を出シ置べし、亦帰ル間敷方江ハ松明等少く出して敵の氣を疑ハしむる事ある之

○夜の印（シルシ）ハ白色を用べし胴巻、腰巻、鉢巻、袖印、鞘巻等心次第なるべし

○夜討ハ轂ヲ揚ル事ヲ禁ズ若轂ヲ揚ル者あらバ即坐に切捨にすべし此故に古ハ枚（バイ）ヲ含ムト云事ありて揚枝の大サなる木ヲ人毎に含マセ或ハ馬の轡ヲ結ぬる事あり之

○夜討の習ヒハ敵陣江入ト等クまづ大将の坐ヲ目懸て切込へし其次ハ敵の馬ヲ切放シて騒動さセ其次ハ早ク火ヲ懸て焼立へし勿論、一所にて働かバ組合次第十人二十人づゝ所ゝにて働へし首ハ切捨之但シ大将の首ト見ば捨ル事なかれ太刀具足迄も分捕して帰ルへし扨又馬ヲ切放シ火ヲ懸ル事ヲ人ゝ心懸ル時ハ接戦の働、次（ツキ）になるもの之然ル故に切放シ、火附等の役ハ戦士の外に三四人ヲ一組トして五組も十組も二十組も備次第に用へし扨右の者ども馬ヲ放シ火ヲ懸終（オハ）らバ是も戦士ト等ク戦へし

○夜討の出立ハ飛道具ヲ多ク不用、手詰の働ヲ第一ト心懸へし

○敵を追崩さバ長追をする事なかれ金を聞次第惣戰士足を止ムへし扨旗馬印の代りに松明十本将机に振立へし是を目當に惣軍一所に集ルへし勿論陣營を乗取たるに於てハ敵陣に有合フ兵器諸道具手に懸り次第取來ルへし

○柵を嚴ク振たる所ハ鋸にて土際より引切推倒して込入へし此働ハ時宜に因て昼も為へき也但昼ハ仕寄道具を用べし

○夜討の時火附役の者ハ乾キたる柴萱（シバカヤ）など四五把づゝ持行て陣營の中火の附易き所を見立て彼ノ柴を積累て火を附へし火を附ルにハ火船の條に出セル焼草込タル大薄（スヽキ）ノ花火ヲ用へし

○夜討を為べき圖四有敵の折着の夜終日合戰ありし夜大風雨雪の夜敵方吉凶に付て騷動ありし夜ハ猶此外臨時に考て討べき圖を討て神速に討懸ルへし

夜討ニ用べき器械左ニ記ス

○階子（ハシゴ）是ハ塀堀或ハ長屋等を越ニ用

○大槌（オヽツチ）是ハ営門等を打破ルニ用

○大鋸是ハ柵塀柱等を引切ニ用

○熊手（クマテ）并大鳶觜（トビクチ）是ハ乗越（ノリコシ）の具ニも用ヒ或ハ力戦ニも用

○柴萱、大薄（スヽキ）の花火是ハ火附道具之

右夜討の大略之猶工夫あるへし此下夜討を防クべき条ゝ二三を記ス猶又不簡を加て防キの手当てをなすへし

○夜討ハ空隙（スキ）を討之へし己（オノレ）ニ空隙なき時ハ何ぞ夜討ニ進事あるへき、扨己ニ空隙なき様ニする事ハ第一、物見を能用へし物見密（シゲキ）なる時ハ敵の寄附（ヨリツク）へき様なし其次ハ軍法、約束正クして一タヒ夜討の寄来ル相圖ある時ハ営中悉ク防キの用意を為（スル）事を精ク教置へし其次ハ営中の戦士の中ニて己（オノレ）ハ不戦して松明の役ト云者を定メ置へし夜討来ルの相圖ある時

ハ己レハ不戦して早ク松明を、ともし面々の小屋の前並に営中の小路々を照して営中を白日の如クに成べし惣して夜討ハ暗（ヤミ）に乗して少人数にて蹶立ルもの也然ルに営中白日の如クならば決して夜討に苦メらるゝ事なかるべし是夜討を防ク第一の心懸なるべし是等の事を能會得せしめ妄りに夜討にハ逢間敷也此外猶工夫を附て防禦の術を為べし将帥たる人能々心を用べし都て夜討ハ不慮の大功を成ものなれども齊の田単か燕軍を破シト加藤清正か朝鮮に於て明の二十万騎を手勢八千にて踏破りし程のたけしき夜討ハ類少なる事なるべし是を夜討の手本ト云とも可なるべし

第五巻終

海國兵談第六

撰士 付一騎前

人ハ不器を貴ども然レとも人ゝ万藝ニ長せる事も成難し但し得手たる所一藝宛ハ有ものなれバ其得手たる所を撰て夫ゝの職を授へし孝ニ五等あり武も亦五等ある心得にて撰へし是主将第一の工夫なれとも無學にてハ其器を撰ブの道合点なきもの也夫を合点せるにハ多ク書を讀て和漢才智の人主人器

を撰フの跡を考見時ハ誰教ルこともなく人器を撰フの道合点せらるへし然ル故に人君第一の勤ハ多ク書を讀て人君の武を知にある（人君の武ハ平之士の武ト不同）扱撰法の大畧を左に記ス猶工夫を加へし

○博文強記にして才智足ク経濟に達シ口才に能（ヨク）骨柄（コツカラ）宜き者ハ家老の職に任スへし

○武勇を第一ト志て兵道に達シ才智ある者をば番頭に用へし

○勇壮にしてたくましく且ツ物に動ぜざる者をば武頭に用へし

○士卒の中、和漢の書を讀て多ク事跡を知ある者を撰て一組ト成置へし

○頓智頓才にして弁舌よろしき者を撰て一組ト成置へし

○兵道を心得、物見等に心きゝある者を撰て一組ト成置へし

○多力勇氣の者を撰て一組ト成置へし

○弓鉄炮弩弓等の上手を撰て一組ト成置へし

○早道早態（ワザ）の者を撰て一組ト成置へし

○天文筭勘等の上手を撰て一組ト成置へし

○水練水馬等の上手を撰て一組ト成置へし

右の外撰次弟幾品もあるへし都て此類の者をば平生重宝致置て軍事ある時ハ旗本ハ云ニ不及番頭江も分ケ預て肝要の用ニ備へし

○惣軍兵を撰フの法ハ骨柄逞クして一藝ニ長シ意氣壮なる者を上とし藝能なくとも骨柄逞ク意氣壮なるを中とし藝能なく骨柄も逞シカラス然とも意氣勇壮なるハ下撰ニ充（アツ）へし藝能なく骨柄なく意氣ぬるめなる者ハ取ニ不足之へ若止事を不得して用イれハ火の番ケ飯焚（タキ）の類なるへし

右惣兵を撰ブの大槩之

一騎前

○一騎前の趣意ハ敵ニ當て勇壮なるを専トス呉子曰以進死為榮退生為辱矣ト又謙信の書ニ真精の鋒先（ホサキ）ハ鳴動れ中ニなや（章）こし（疾）ト云リ又同書ニ應神劍ト云事なり是ハ接戦の時ハ前懸リニ成て冑（カブト）を敵の劍（ツルギ）にまかせて飛込（コメ）トなり如此なる時ハ軍神敵れ劍を遮（サヘキツ）て我身ニ恙なしと云義ニて真一文字ニ敵陣江飛込事を主トするの教へ是等を一騎武者接戦の大主意ト心得へし扱馬の乗形物見の礼儀、武者詞、隠ニレ字等の事ハ一騎前の奥の手にして末（スヱ）ニ近き事なれど大畧を知ても足（タル）へしト、尤ニ其本なる要領の事二三を挙猶考べしト

○六具ト云ニ品〻あれども先一騎前の六具ハ胴（ドウ）、冑（カブト）、籠手（コテ）、臑當（スネアテ）、太刀（タチ）、草鞋（ワランチ）へ、此外大将の六具、身堅（ミカタメ）の六具、備の六具番所の六具等なり閑暇の時学ビ置べし

上ニ云ル如ク六具ニ品〻有て悉ク六れ數を用ル事なれども是ハ亀藏六ハより出

て例の牽強な除べけれど嚴く六ハに限りある事の揆（コヂツケ）に思ふも柱（コトヂ）に膠の類なるべきに因て小子ハ一騎の六具に糒を加て七具ト教ル之

○身廻りの堅メハ下より初メ、左を先右を後トス脱（ヌク）時ハ上を初メ右を先トせる之

○鎧の繊（オトシ）毛、甲冑の名所など詳なるに如ハなけれども大畧を博識にせるも可之其故ハ是等の事に泥ム時ハ要法を失せる事なれど之

然レなから敵の容躰を見覚て大將江言上の爲、或ハ射中（イアテ）又ハ手を負せなど仕ある時の爲なれど右躰の事を一圖に心得さるハ第一の不覚之ト知べし

○組討の爲に時〻角力を取べし古代ハ角力も武藝の一件にして武士の藝能を吟味せる箇條の中に相撲も入ある之尤諸國より相撲人とて有力の人を進レ事諸史に見へあれども當世ハ歌舞妓（カブキ）同様の物に成て相撲ハ武士

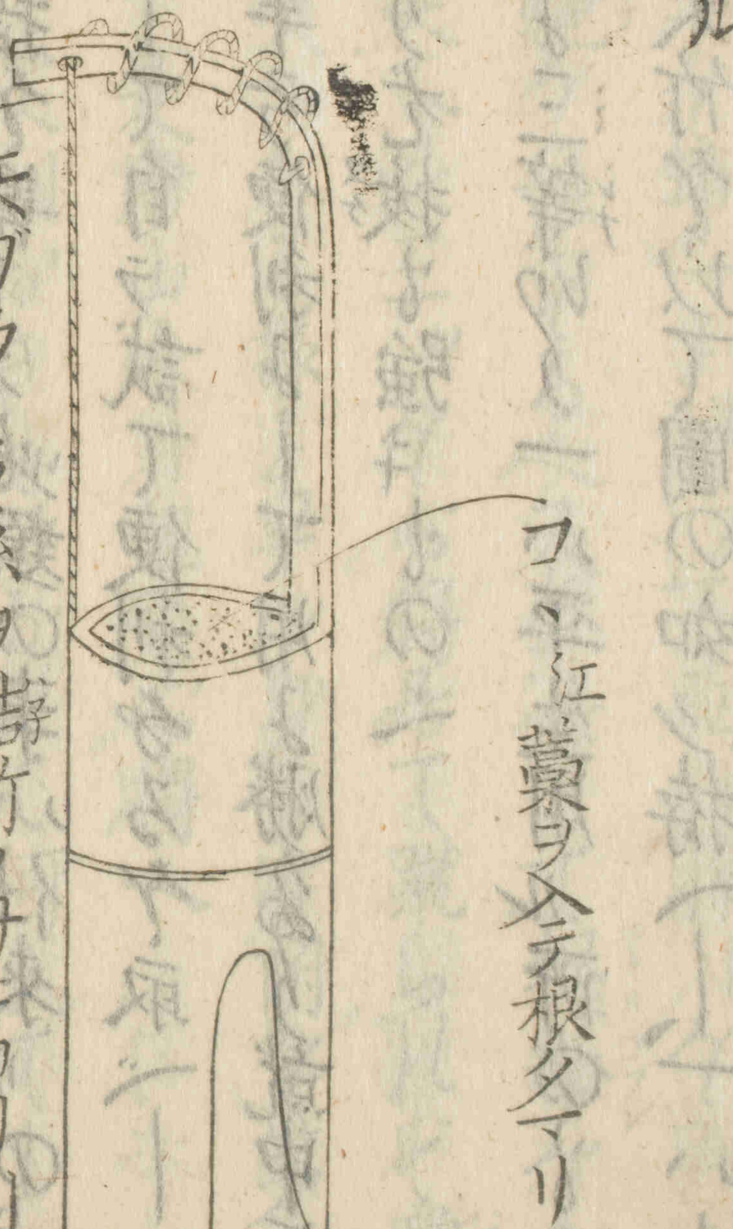
の藝よなりとしくと思ふハ不覚なるべし都て組討ハ高ク組ハ弱し、卑ク組を善ト心得べし

○都て組討ハ早ク右手指（メテサシ）を抜て組なり突通し、忠度亦ハ鹿之助等が組様を手本となしべし

附異國人ト組ニ數の心得なり先異國人ニ國々の差別有て人の大小、力の強弱各殊ニ都て琉球暹羅（シヤム）等の南人ハ骨柄短少ニして氣力も弱し唐山も浙江南京以南の人ハ琉球暹羅等の人ニ准ぜる之亦山西（スイ）北京及ヒ韃靼朝鮮等の北地の人ハ骨柄も壮大ニして力も　日本人より強し只氣象の鈍（ニブ）きたかゆへ歐羅巴人ハ只長高（タケ）き迄ニして、さのミ力もなく氣象も鈍し、扨　日本人ト北地の異人等ト角力をするを度々見るニしニ四ツニ組ては北人、後へも不退脇へも不倒只前江をかして、おて落せたら、伏ニ倒る、也又一ツの心得なり唐山人の武藝ハ

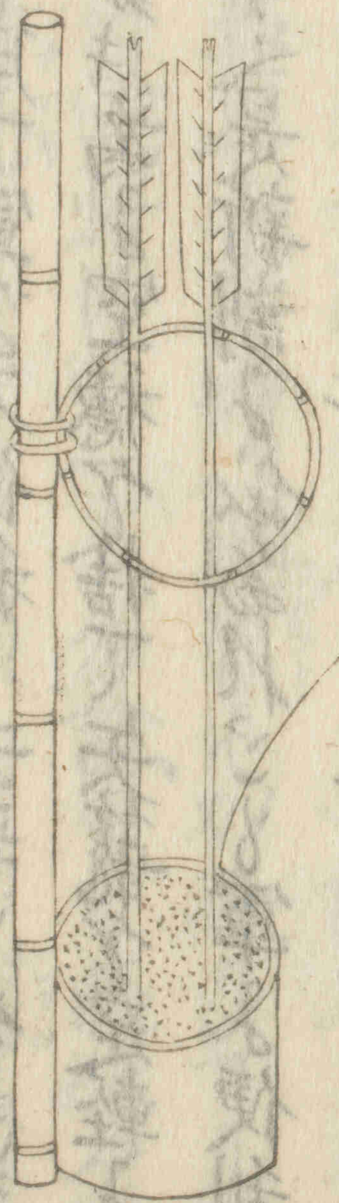
蹴（ケ）ル事を第一に習ふて胸と膝とを蹴ル也
又後驟（アトバネ）を能せる也又拳法として握拳（ニギリコブシ）を以て
眼を突也此三ツを心得居て蹴られず驟（ハネ）ら
れず突レざる様に早く身に寄附を第一と
すべし是唐山人と組の心得也
○武藝ハ定りなきものなれバ何にても一藝
を熟スべし多藝に如ハなけれとも多藝を心
懸ル時ハ熟達仕難キ事なる也然ながら太刀
ハ人ゝ不帯と云事なし此故に太刀打をば人
人稽古あるべし就中抜打（ヌキウチ）の強キを貴ふ也是
太刀を学ブの要法也
○太刀帯（ハキ）に着ぬる太刀ハ抜難キもの也直
に帯（江）指を善とス此類の事ハ仕来（レ）りの式法
に不泥して自ラ試て便利なるを取べし
○弓ハ半弓便利にして用に勝れり就中馬上
に利あり尤抜（スケ）も強キもの也
○矢籠（レコ）に三等（ミシナ）あり一ハ平生用ル所のものな
り、一ハ大竹を以て圖の如く拵へし、一ハ小竹

よて作ル



コヽ江藁ヲ入テ根ダマリトス

一矢ガラミノ糸ヲ掛竹ノサキヨリ引通シテ其余リヲ下ヘ引ツリ置ベシ矢ヲ抜バ竹ハ子上リテ糸シマル故残リノ矢抜落ズ



根タマリハ桶箱筒箇ノ類或ハワラヲ以テ平ツムベシ

細竹ヲ輪ニシテ子チカヘシニスル故矢シマル

○當世の習ヒニて足軽ハ皆空穂を用ル事なれども空穂を腰ニ付ル時ハ重クして働難し殊ニ押行時などハ大ニ草臥ルもの也足軽ニ矢籠（シコ）を用て軍ニ不便利ト云事もなき事なれば働易き為ニ空穂を捨て矢籠を足軽ニ用ユべき事也是新制ニ似たれども軍ニ便利ならば何ぞ新法を憚ル事あらん可制く く

○桐油紙を以て長二尺ばかりニ袋を拵て雨天の時矢籠ニ懸べし尤平生懸置ても害なき事也

○重鎧を好ム事勿レ美麗（ウツクシ）ニ飾りたる鎧ハ必重きもの也都て一騎の出立ハ軽くして出立べし、至極暑き時ハ胴冑（トウカブト）ばかりニても事すむもの也ト覚悟あるべし勿論冑も軽きを用べし鎖鉢巻（クサリハチマキ）或ハ半首（ハツフリ）の類ニして錣（シコロ）様の物、後口を覆へるも事足ルもの也大立物等を用ルハ褒（ホメ）める事ニもあらざる也

○太刀ハ古作を好ム事なかれ只丈夫なるを

貴ブ、軍中にてハ清平の世の如ク太刀、刀を
玉の如ク玩物同様に大せつに取あつかふも
のにあらず只敵を扣(タヽキ)ひしく鉄棒なりと心得
べし

○帯太刀ハ尺の伸(ノビ)たるハ好からさる事也大躰
一尺八九寸二尺内外を善とす脇指ハ八九寸
一尺を用べし都て太刀、刀ハ皆蛤(ハマグリ)刃に磨べし
刃肉を落す事なかれ

○力量ある者ハ大太刀を用ル事あり帯難キ
程のしなゝる物ハ下人に持せ又ハ背に負事
もあるべし此太刀ハ力量にまかせて何程も大
物を用べし

○鎗(ヤリ)ハ徒(ス)鎗三寸穂にして柄ハ丈夫に短キを
善とす是又敵を扣例(タヲ)ス捧なりと心得べし當
世流義にふを建て華麗に制作したる鎗ハ戦
場に用ヒても只一打に打折べし武士たる者心
を用べし

○都て兵器にハ住國ト姓名を漆を以て書付

へし亦事急なる時ハ墨を以ても書し又小刀
まて彫付ルも可之

⊙馬ハ只ハ腕爪（ウテツメ）の強きを貴ブ五姓十毛の説或
ハ相生相剋の吟味或ハ旋毛（ツムジゲ）馬形等の事なし
少も拘る事勿し然しなから手ニ余ル悍（カン）
馬ハ乗さるものと心得へし

木火土金水の五行ト立て相生相剋を論
スルハ唐（カラ）山を本家ニして其外ハ唐山れ
弟子（テシ）分なる　日本朝鮮暹羅（シヤム）琉球等の

國ニ而已ニて莫臥尓（モコル）百尓西亜（ハルシヤ）印弟亜（インデヤ）等の
諸國ハ地水火風を以て四行ト立（タテ）阿蘭陀
及ヒ欧羅巴諸國ハ水火氣土を以て四行
ト立られ此國々ニ四元行の説有て五
行の生剋なしト然しれ何等ニ論してもさ
のミ害もなき事と思ハるれど我黨も表
立し議論ニハ五行の説ニよるへし荒氣
なる武用ハ其説ニよらずとも志かるへ
きなり

○氣弱キ馬にて水を渡スにハ水際にて早駈
四五偏策て其氣の脱ざる間に渡スへし
○歩行にて急流を渡ルにハ三四十人手に手（テ）
を取組て渡ルへし、水冑を浸（ヒタシ）ても流レさるも
のなり
○歩行にて一人渡ルにハ六七貫目の石を肩
に荷て渡ルへし
○沼を渡ルにハ芦簀（ヨシス）、竹簀の類を段々に打敷
其上に物を置て踏渡ルへし尤渡ルに随て段

々に先江繰ルへし
○草鞋（ワラジ）、馬沓（マクツ）等の作り様も人々心得居へき事
なり不知者ハ越度なるへし
○飯を炊にハ水一斗五升沸し立て米一斗打
入ル時ハ飯になる亦鍋釜なき時ハ芝の上に
米を置水を灑（ソキ）懸て又上より芝くれを逆に打
懸て其上にて火を焚て飯になる又米を水に
ひたし菰（コモ）むしろの類に包ミ浅ク土中に埋て
其上にて火を焚て飯になる又米を水にひた

志桶に入レよき頃の石を焼て米中に打入レを飯になる又洗米を布袋に入青葉を以て厚く包ミ焚(タキ)火の中江投入(ナゲ)テ蒸(ムセ)て飯になる又潮(ウシホ)にて飯を炊には釜の底に茶碗を伏置其上江米を入て炊べし塩氣ハ茶碗の中江凝ル

○水練の術心得居べし不知者ハ越度之

○野陣病陣ともに己が小屋に入時ハ四方を目の及ブ限見届置べし尤臥時ハ何の方を枕になし何の方を跡(アト)に為トえきト心覚して臥(フス)べし不意の事出來ル時狼狽(ウロタヘ)さるもの也且亦病陣の時ハ病人はきと病裏の方をも能く見届置べし

○馬の芝(レい)繫品〻あり一ハ手綱にて前足を縛(シバリ)置き一ハ鬣(オモカケ)のかうを髪中江引よせ置き

○面頬(ホウ)なき時平生の如く冑(カブト)の緒を結ブ時ハ顋(オトガイ)痛む也其時ハ下顋にて、よき程に真結に結止て其余ハ常の如く結ブべし

○板障泥(アオリ)を二枚合に拵て水汲の具に用ル事

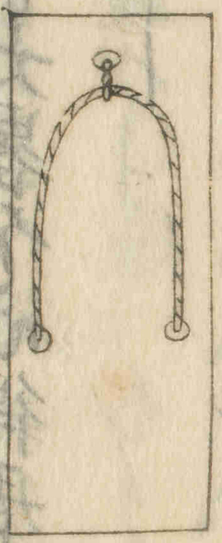
ひり

○鉄炮をハつそくに懸ルにハ筒先を下に為て左の肩より右の脇江筋違に懸へし、懸り口に肩の上より筒先を前江引廻して敵陣江一放（ハナレ）打懸て煙の下より切込時ハ一段手ぎこき懸り口なるへし、半弓をハつそくに懸ル事ハ直に弦にて懸へし但弦の方を前にまそへし

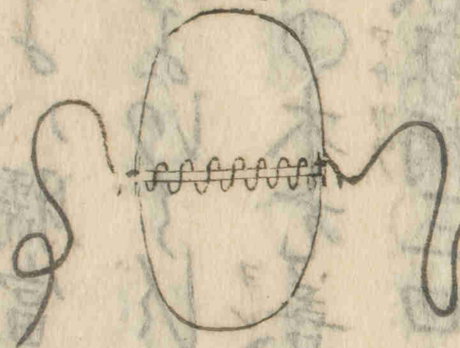
○戦場江ハ竹筒に水を入て腰閣に帯（オブ）へし

○草鞋ハ鷹野懸に着へし

○足入深キ地并大雪なとを渡ルにハ橇（カンジキ）に架べし其制二ツあり左に圖ス



是ハ板カンジキ之板ハ緒ヲ付テ木履ノ制ノ如クスレ之



輪（ワ）カンジキ之木枝ヲ以テ圖ノ如ク曲ニ其中ニ縄ヲ懸ルヿ圖ノ如レ是ヲ足ニ着ル之

○水を渡ルにハ、臑當（スネアテ）佩立（ハイダテ）等を脱（ヌグ）事なり

○接戦の場になるとも草鞋に中結すべし

○松明（タイマツ）ハ、楢（ナラ）の木尤善（ヨシ）、又乾細竹（カレタルシノダケ）、三四十本結束

て用ルも善、麻柄（アサカラ・オカラ）三四十本を結束ルもよし

○物見も大略を心得居べし別に物見傳なり

考合スへし

戦場江出ル者の所持すべき品々

○胴服（ドウフク）ト云て厚綿（アツワタ）の廣袖（ヒロソデ）羽織（ハオリ）、裏表（ウラオモテ）ともに桐油布（ユヌノ）を用へし赤紙にても可也此品を鎧の上より打着（キ）レバ寒をも防キ雨をも凌キ又夜具の代りにもなる重宝の物トすべし然なから軍に臨て急にハ制作仕難シ平日の心懸にて制シ置へし

○雨具ハ簑笠なるべし然レとも是ハ定法之戦場にてハ何等の物にても手に當り次第引被（カブ）リて雨を防クべし但シ雨を防クも押行時の事也接戦に至てハ大将士卒ともに濡ぬれト知べし

青谿書屋

○弦巻ハ指添の鞘江貫て帯江結付べし
○打替（ウチカイ）袋ニ糒（ホシイ）五六合只乾味噌少シ入て常ニ腰間ニ帯、肝要の時ニ非されハ食フ事なかれ
○二重廻りの手拭を腰ニ纒フべし
○細引一筋腰ニ帯べし
○紙類何レの處江なりとも少く用意せべし
○燧（ヒウチ）袋此中江氣付、血止、艾、虫薬、并ニ馬薬、等用意あるべし此袋ハ刀脇指の栗形の處江結付ル、扨又甲冑して大ニ働ク時ハ藥氣逆上す

110X
158
1